

最後の言い訳
～もう一度、私に恋をして～

東めぐみ



プロローグ（序章）～一枚の写真～

プロローグ（序章）～一枚の写真～

私が応募した写真がコンテスト最優秀賞に選ばれたのは、本当に自分でも信じられないことだった。

今、我が家の玄関から廊下へ上がったばかりのところ、その傍らの壁には白い木製フレームに収まった一枚の大きな写真が飾られている。その写真はA四判の大きさと、一面に蒼い空と海がひろがっていた。空には真綿のような真白の雲が幾つも浮かび、ブルーサファイアを嵌め込んだような鮮やかな海は波打ち際からひろがり、白い砂浜が果てなく続いている。

それだけであれば、特に珍しくはない南国の海の美しい風景だ。けれど、その写真が人眼をひくのは、海が空をそのまま映し出しているからだ。判りやすくいえば、海面に空がそっくりそのまま映り込んでいる。

ミクロネシアのウユニ塩湖はその絶景ともいえるべき素晴らしい景観で、`奇蹟、とまでいわれている。その写真は実はウユニ塩湖を撮影したものだった。ウユニ塩湖は`鏡張り、という現象が起き、その瞬間の奇蹟ともいえるほどの荘厳かつ美しい眺めは世界中の人々を魅了して止まない。鏡張りとは、空の様子がそのまま湖の湖面に描き出される、それこそ奇蹟としか言い様がない絶景だ。

そして、私は今から六年前の夏、結婚式を終えたばかりの夫と共にそのウユニ塩湖へとハネムーンに訪れた。私がコンテストに応募したのは、実はそのときに撮影したものだった。

丁度湖面に蒼穹が映し出されたその瞬間、私は用意していた三脚を使い一眼レフのオートシャッター機能を使い、自動でその一瞬の風景を切りとったのだ。一面にひろがる蒼い空に雲が浮かび、湖面には蒼い空と雲が同様にひろがっていて、どこまでが空でどこからが湖なのかさえ定かではない。

その果てなくひろがる青空と蒼穹の右端、波打ち際に白いシャツと礼装ズボンの花婿、傍らに白いウェディングドレス姿の花嫁が小さく映り込んでいる。

花嫁はやカラーリングした明るい茶色のロングヘアを風になびかせ、肩を大胆に出した南国にふさわしい純白のドレスを纏っている。新郎新婦ともに後ろ姿しか見せておらず、写真の大部分を占めるのは空と海のはずなのに、右端に辛うじて映っているその花嫁花婿こそが物語の主役なのだと思える人はすぐに理解するはずだ。

私はその写真を`ミラクル イン ウユニ、と名づけた。自分にしてはよくできたとは思っていたけれど、応募したのはほんの軽い気持ちだった。まさか有名なカメラ製造メーカーが主催する大きなコンテストで私のその写真が金賞に輝くとは正直、欠片ほども想像しなかった。

今でも私の撮った写真が選ばれたことこそが奇蹟だと思っている。けれども、その写真を見る度、私の心には複雑な想いが湧き上がる。ハネムーンという人生で最高に幸せな時間をミクロネシアという日本から遠く離れた絶景の中で過ごし、奇蹟とも呼ばれる美しい眺めを見た一、誰もが私を幸せな女だというに違いない。

だが一。本当なら、その奇蹟の一枚に収まるべきはずのひとは、夫ではなかった。少なくとも、私が隣に立って欲しいと願ってやまなかった男は夫ではない。

だからといって、私とその昔の恋人に未練を抱いているのかといえば、応えはNOとしか言いようがない。今の穏やかな幸せを私はかけがえなく大切なものだと思っているし、それを与えてくれた夫にも穏やかな愛情を持っている。

でも、それはけして烈しい気持ちではないだろう。かつて`彼、に対して感じたような、胸が狂おしくなるような、切なさに泣きたくなるようなものではない。

何年も前に終わった恋は、ただ今は懐かしさしか感じられない。終わった恋を振り返る時、人は亡くなった恋人を懐かしむような気持ちでしか思い出せない。そう、確かに、彼との恋も時間も終わったのだ。

果たされることのなかった約束は、私にとって永遠に叶うことのない夢となった。私は彼ではない別の男と結婚し、彼と訪れることをあれほど夢見た天上の楽園ーウユニに別の男と訪れた。

良かったら、この写真に秘められた一葉わなかった恋の思い出を聞いて下さい。

シーン1 エンゲージ～サファイアの夜は忘れられなくて～

シーン1 エンゲージ～サファイアの夜は忘れられなくて～

香奈子の耳許で同僚の佐保が囁いた。

「香奈ちゃん、彼氏が迎えに来てるよ」

ぼんやりとしていた香奈子はハッと我に返り、慌てて笑顔を作った。

「ホントだ、もう、こんな時間なんだ」

白石香奈子は二十二歳、H駅前のコンビニで正社員として働いている。バイトではなく、勤務は月曜水曜金曜が午前中だけ、その他は正午から夜八時までの勤務となっていた。休みは不定休、バイトの高校生や大学生が休むときは正社員の香奈子らが穴埋めしなければならず、給料の割にはきつい仕事だと香奈子自身も認めている。

しかし、今日日、私立の三流高校卒業の学歴しかなく、これといって特技も資格もない香奈子を率先して雇ってくれるような有名企業があるはずもなく、高校卒業以来、ずっとこの店で働き続けてきた。

今は日曜の夜で、特に八月の盆明けまもない今、学生たちは夏の学校課題を仕上げるため、バイトどころではない。そのため、四人いるバイトは皆、休みを願い出ている有り様で、香奈子ともう一人の正社員の佐保は二人だけでてんでこま이었다。

八時までは佐保と香奈子と二人だけで、それ以降は男性の正社員と交替する。牧原と山口といい、牧原は五十代の頭の禿かかった中年男性、山口というのは、二十代前半ほどの若い男である。年の行った牧原は如才なく冗談を言っでは香奈子や佐保を笑わせる憎めない男だが、山口という若い店員は無口で面白みもない。いつか佐保と香奈子は言ったものだ。

「山口君が笑うなんてことがあるのかしら。」

新田佐保は二十九歳で、香奈子より年上ではあるが、気取らない人柄で好感の持てるタイプの女性である。既に結婚していて、結婚五年目になるが、子どもがいないため、三年前からコンビニに勤めていた。

香奈子は年下ではあるけれど、先輩である。それをいえば、年はいちばん若くても、香奈子はこの小さなコンビニではまさしく先輩なのだ。男性社員の牧原も山口も香奈子よりは勤務年数は短い。

香奈子の次に長いのは牧原だ。牧原は香奈子より一年遅れて入社してきた。もちろん、元はそれなりに名の通った商社に勤めるサラリーマンだったのだが、ここのところの不景気の煽りを受けて会社の経営が思わしくなくなった。そのため、上の方から肩たたきに合ったらしい。自分から早期退職を願い出たら、退職金も上乘せするといわれたそうだ。

「一必要とされていない会社にお情けで残して貰っても、この先、出世は見込めないし、かえって居心地悪いただけだからね。」

幸いにも早く結婚して、一人娘もとっくに嫁に出し、夫婦二人だけの暮らしだった。特に金が必要ようなこともないからと、牧原は言われたとおりに自ら辞職届けを出し、まとまった退職金

を受け取った。妻と相談して退職金を元手に何か商売でもしようかと相談していたところ、コンビニはどうかという話になった。

大手のコンビニのチェーン店の店長に志願してみようかと思いつき、そのためにまず実地で店員として勉強しようと今の店にバイトで入ったのがそもそもの始まりだ。

ところが、その後、妻が体調を崩して、新規開業どころではなくなった。入院費用なども必要になり、とりあえず退職金には手を付けたくなかったのが、牧原はそのままコンビニに勤務することになり、その仕事ぶりを評価されて正社員として本腰を入れて働くことになったというわけである。

悠木佐保は現在も不妊治療中だ。人工授精を数度試みても成功しなかったため、体外受精を勧められているという。そのためには治療に莫大な金が掛かるので、コンビニで働き始めたと聞いている。

それぞれがそれなりの事情を抱えていた。勤務歴五年の香奈子を筆頭に、四年の牧原、三年の佐保、漸く一年になる山口といったメンバーが正社員だ。もちろん香奈子が入った早々は他に店員がいたけれど、こういう仕事は実は長く続くようで続かない。特にバイトならともかく、正社員ともなれば尚更だ。

誰でももう少し労働条件の良い—収入が良く肉体労働の少ない仕事を望むものだ。だが、中には例外もある。香奈子が今の仕事に甘んじているのは、もちろん他に行き場所がないというのもあるけれど、香奈子自身は今の職場をそれなりに気に入っているからでもあった。

このコンビニはいわゆるフランチャイズチェーンではなく、個人がやっている小さなコンビニだ。その分、融通が利く点もあるし、逆に過重労働になりがちなデメリットもある。だが、住めば都というように、慣れれば、それなりに働きやすい職場ともいえた。

そういうわけで、入社当時、五人いた店員はいつしか入れ替わり立ち替わりで、いつしか香奈子がいちばんの古株になってしまっている。現在のところは、香奈子の他にその三人と学生バイト四人で店を切り盛りしていた。

オーナーは大隅という四十歳くらいの男性で、人柄的には可もなく不可もなくといった印象である。大隅はとりあえずはオーナー兼店長という立場にはあるけれど、実際に店に出てくることはまずない。たまに訪れて様子を見るだけで、担当は経営の方だけだ。店の実際的な運営は副店長の肩書きを持つ香奈子に一任されていた。

香奈子はコンビニのお仕着せの上着からスマホを取り出した。

「もう八時前よ。佐保さんもそろそろ上がりましょ」

「そうね」

既に牧原と山口は出てきている。控え室で着替えでもしているのだろう。

やはり女性店員では夜間対応は何かと問題があるため、八時以降から店を閉める深夜二時くらいまでは男性店員が担当する。このコンビニは個人営業でもあるため、二十四時間体制ではない。小さい店ではあるが、この界隈にスーパーもないので、地元の人がよく買い物に来るから、それなりの収入はあった。

駅前とはいえども、私鉄沿線の急行や特急は止まらない、小さな無人駅なのだ。駅から続く昔ながらの商店街は今や殆どの店が閉めてしまっている。昭和の頃には賑やかだったであろう繁華街も今は夢の跡で、昼間でさえ人通りがなく、無人の店が並んでいる様はどこかの廃墟かと思ってしまうようなほど寂れている。

「それじゃ、お疲れ」

香奈子は佐保に軽く頭を下げ、女性社員用の更衣室で手早く着替えを済ませ、タイムカードを押した。更衣室を出てきたところで、隣の男性更衣室から出てきた山口と遭遇する。

「お疲れ様です。今日も暑いですね」

カレンダーではもう立秋は過ぎたけれど、連日、三十五度近い酷暑は流石に堪える。

度の厚い黒縁メガネをかけた山口はいつものように表情のない顔を向け、会釈する。

「お疲れ様です」

もごもごと口の中で呟くように言い、香奈子の前を横切っていった。いつものことなので、こ

の無愛想ぶりにも愕きはしない。

社員用の出入り口というのはないので、店内に戻って客が入ってくる入り口から出ることになる。入れ替わりに、二人の幼い子どもを連れた三十代くらいのカップルが入ってきた。

「いらっしゃいませ」

既に私服に着替えているため、香奈子がこの店の店員だとは判らないだろうが、副店長として身に付いた癖だ。子連れの夫婦にすれ違う時、丁寧に挨拶した。

夫婦は少し戸惑った顔をしているが、香奈子はそのまま店を出た。

ああいうのは良いな、と改めて思う。家族というものに対して、香奈子は強い憧れがあった。香奈子の両親は彼女が幼い頃、離婚している。母親は女手一つで香奈子を育て、高校まで出してくれた。

今も香奈子が子どもの頃から続けていた保険外交の仕事をして日々、忙しく飛び回っている。二十歳で香奈子を生んだ母はまだ四十三歳と若い。数年前からは仕事を通じて知り合った二歳下の男性と恋人付き合いをしている一と、これは母自身から聞いた話だ。

相手の男性もバツイチらしく、プロポーズされているとか。男性には子どもはいないので、母が躊躇しているのは、自分もう子どもを望める年ではないからという理由だった。相手の人は子どもはできなくても良いからと熱心に望んでいるという。

一そこまで言ってくれる男と出逢えることなんてそうそうないよ。早い中に再婚しなよ。

と、母に積極的に勧めていた。十九歳で父と出会い、出来ちゃった結婚をして香奈子を生んだ母は、父の浮気が原因で二十三歳で独身に戻った。以来、二十年間も一人でいたのだ。二十三の娘がいるようには見えない母のことだから、その間、付き合った恋人もいたし、プロポーズされたことも何度かあったらしい。

けれど、結婚に踏み切らなかったのは恐らくは香奈子のせいだ。香奈子が嫁ぐまで、自分は幸せにはならないと決めている母だった。

自分の幸せよりは娘の幸せを考える母だったから、大切にしては貰った。溢れるほどの愛情も注いでくれた。それでもなお、父親不在という大きな家庭の穴は、母一人では埋められなかった。父親がいて母親がいて、子どもの笑い声が絶えない—そんな家庭を作るのが香奈子の夢となった。いや、それは夢というよりは悲願に近いものだったかもしれない。

小学校一年の授業参観の時、`ぼく、わたしのしょうらいのゆめ、というテーマで作文を書いたことがあった。全員が読み上げたのだが、他の友達も皆、`パティシエになりたい、とか`サッカー選手になりたい、というごく他愛ないものだったのに対し、香奈子は

一私は早く結婚して、お嫁さんになりたいです。お父さんがいて、お母さんがいて、子どもがいる普通の家庭を作りたいです。

と読み上げたら、列席していた他のお母さんやお父さんは何ともいえない表情をしていた。その時、母も多忙な仕事の中を来てくれていたのだけれど、母が泣きそうな表情をしていたのには最後まで気付かなかった。

その日の夜、母は香奈子を怒るわけではなく、抱きしめて泣いた。

一ごめんね、香奈子に淋しい想いをさせて、ごめんね。

今なら、何という残酷な仕打ちを母にしてしまったのだろうかと思ってしまう。だが、六歳の女の子にはそれが理解できなかった。

いわゆる適齢期と呼ばれる歳になって、香奈子はますます家庭への憧れは強くなった。殊に順也という恋人ができてからは、いつか自分は彼と結婚して、幼い頃に夢見た家庭を作るのだと信じてきた。

入り口に続く、さして広くはない駐車場にインクブルーの軽乗用車が停めてあった。そのドアに長身をもたせかけるようにして、順也は煙草を吸っていた。

「順也君、ごめん。待った？」

香奈子を認めるや、順也はその整った面に満面の笑みをひろげた。

「いや、まだ八時過ぎたばかりだし。俺もバイト先からここに直接来たんだ」

「そうなんだ」

順也が煙草を路上でもみ消し、車のドアを開けた。ダッシュボードの下にある灰皿に吸い殻を入れる。彼のこういうきちんとしたところが香奈子はとても好きだ。

最近の若い男の子の中には、吸い殻を平気でポイ捨てする人が多い。公共の場所を平然と汚すことに対して、何の抵抗も持たない。そういうごく当たり前のことができない、理解できない人が多い中、順也はなかなか几帳面で常識を持った青年だ。

香奈子もいつものように車の助手席におさまった。この車は順也がバイト先から借りているものだ。廃車になる寸前だったのを順也が先輩に手伝って貰って修理した。順也は二人が暮らすコーラスからほど近い自動車修理工場に勤めている。将来は自動車整備士になりたいという夢を持っていた。

「今日ね」

と、助手席に座った途端、香奈子はその日、店で起こった様々な出来事を順也に報告する。順也は一つ一つの出来事に面倒がらずに丁寧に相槌を打ってくれる。聞き上手なところも香奈子が彼の大好きなところの一つだ。

本当に順也については、嫌いなところを探せといわれても無理だと思う。それほどに彼のすべてを愛していた。

順也と付き合いようになったのは、彼がこのコンビニにたまたま客として飛び込んできたのが馴れ初めである。順也はサーフィンをしていて、H町の隣のI町の海に行く途中で、この店に立ち寄った。同乗していた男友達が急な腹痛で大変なことになって、まずはトイレを借りるためだった。

しかし腹痛は治まらず、結局、香奈子が順也の運転する車に乗って町の総合病院まで案内することになった。順也の友達も急性胃腸炎と診断され、適切な手当を受けて事なきを得た。一晩入院して点滴をした翌朝、無事に退院した。

バイクしか持っていない香奈子は店に一度戻ると、自費でサンドイッチやらコーヒーやらを買い、またバイクで病院に戻り順也に差し入れた。そのときはそれで終わったのだが、数日後、順也がふらりと店を訪ねてきて、この前のお礼に食事をご馳走させて欲しいと誘った。

それで二人で食事をして、何となくまた逢う約束をしてということが数度続き、三回目のデートで「付き合っただけ、と言われた。」

「私、どうしても、ああいうのに憧れちゃうのよね」

香奈子が言うともなしに言うのに、順也が「ん？、と、首を傾げた。

「さっきの親子連れ。お父さんがいてお母さんがいて、子どもがいる。当たり前なんだけどね」

順也の運転する車は既に車道を軽やかに走っている。この辺りの道は午後八時を回れば、車どころか、人気すらない。

「そういえば、工場の先輩の奥さんが急に産気づいてさ。何か二ヶ月くらい早いんで、帝王切開になったって」

順也が思い出したように言い、香奈子は頷いた。

「それは大変ね。奥さんも赤ちゃんも無事だったのかしら」

「うん、無事に手術も終わったらしいって、今日、工場の方に連絡があったって。先輩、昨日今日と仕事を休んで奥さんに付き添ってるから。両方とも実家が遠方で、両親にもなかなか来て貰えないし、上にまだ小さい子が二人いるから、先輩も大変みたいだ」

「そうなんだ。でも、奥さんも赤ちゃんも退院して戻ってきたら、愉しくて賑やかになるわね」

「だよな、俺も一人っ子だからなあ、香奈子と同じで子だくさんというのは憧れるよ」

順也が切れ長の眼を優しく細めて言う。

香奈子と順也が見つめる未来は同じだ。そこには、子どもがいて、両親がいて、笑いが絶えない家庭があった。

順也の整った顔が曇った。ジャニーズの若手俳優の誰それに似ている彼は、はっきり言って女の子はモテる。二人で歩いていると、通りすがりの女の子が順也をチラチラと熱い眼差しで見ているし、そんなときは決まって

「あの冴えない子が彼女なの？ 全然釣り合っていない。」

そういう羨望と嫉妬の視線を寄越されるのももう慣れた。香奈子は取り立てて醜いと自分を思ったことはないけれど、さりとて美人ではないことも判っている。身長百五十七センチ、スタイルも容貌も平凡で、眼は一重で細くてつり上がっているし、お世辞にも可愛いとも言えない。

女優のような華やかな顔立ちをした母とは似ても似つかない。恐らくは顔も憶えていない父に似たのだろうと諦めている。

恐らく彼女には不自由しないであろう彼が何故、香奈子みたいな平凡な女の子に興味を持ったのか今もって判らない。しかも、母親の猛反対を押し切って香奈子と同棲までしているなんて一。

彼のお母さんが香奈子との交際を反対するのも無理はないといえば、他人は香奈子をどう思うだろうか。身の程をわきまえているというか、それとも、お人好しだ馬鹿だと嗤うだろうか。

けれど、事実は事実だから仕方ないではないか。順也の母堂本冴子は日本でも有数の家電メーカー一堂本電機の取締役社長であり、順也はその冴子の大切な跡取り息子だ。

順也も幼い頃に父を失ったという点では香奈子と変わらないが、ただし、冴子は離婚したのではなく、自動車事故で夫を失ったのだ。当時、堂本電機の社長が亡くなったという高速道路での悲惨なトラックと乗用車の追突事故は新聞でも大きく報道された。それほどの影響力を持つ大企業なのだ。

堂本電機は日本国内だけでなく、海外にも幾つか支社を持っている。傘下に治める関連会社は十指で足りないといわれている。順也は、そんな大企業の御曹司であり、高校生ときには常務取締役の地位を与えられていた。もちろん、学業に専念していた彼は名目上の役職にすぎなかったが。

一私は、彼にはふさわしくない女。

順也の母に判断されたとしても、仕方のない話だと受け容れるだけの分別は香奈子にはあった。

片や日本有数の大企業の跡取り息子にして、東京の名門私立大学の学生、香奈子はといえば、地方の三流私立高校出のコンビニ店員。同じ母子家庭でも、その差は歴然としている。世間でいう`格差婚、の最たる例だ。

順也と香奈子が出逢ったのは丁度、一年前だ。七月、大学が長い夏休みに入ったときに彼は故郷のH町に戻ってきていた。

堂本電機はH町に本社を構えている。創業者である先々代がH町の生まれだ。中規模どころの地方都市には珍しい、東京でよく見かけるような超高層近代ビルは殊に人眼を引いた。従って、経営者一族である堂本一族もいまだにこのH町で暮らしていた。

二人が一線を越えたのは、いつだったのか。順也に告白されてからさほど経ていない時期、もっといえ、初めて食事に誘われてからでも二週間は経っていなかったと思う。

彼が地元に戻ってきたときはサーフィンによく行くという隣のI町までドライブデートした帰り道、道添いのホテルで結ばれた。むろん、香奈子はバージンだった。順也の方は経験は多くはないにしても、初めてではなかったようだ。

初めて男女の仲になってからほどなく、二人は一緒に暮らすようになった。最初は順也が香奈子が一人暮らしてしているコーポラスに泊まるようになって、その中、`いちいち帰るのが面倒臭いな、と、いつしか居着いてしまったのだ。

そう、その頃は本当に二人共に一瞬でも離れていられないというほどだった。最初に食事をし

た翌日から、メールも電話も毎日何度もやりとりしたし、数日おきに逢った。

七月下旬に出逢って、八月にはもう同棲していたのだ。順也の夏期休暇は八月一杯だった。当然、九月の新学期に備えて、彼は大学に戻らなければならなかった。

だが、彼は戻らなかった。

—俺、ずっと香奈子と一緒にいたい。

彼の気持ちは嬉しかったけれど、それがひどく子どもじみた願いであることは香奈子には判った。だから、順也に心から頼んだ。

—私たちの未来を真剣に考えるなら、お願いだから、大学に戻って。

今は一時、離れなければならないが、別れは永遠ではない。順也が大学を卒業して晴れて母親に認めて貰えれば、自分たちには「結婚」という選択肢も見えてくるのだから、と。その間、自分も思うように逢えなくて淋しいが、二人でずっと暮らせるようになるためだと思って頑張るとも説得した。

でも、彼は頑なに「帰りたくない」と言い張った。

順也はずるずると香奈子の部屋に住み続け、九月が過ぎ、十月になった。

そんなある日、彼の母から呼び出された。H駅から歩いて五分ほどの、商店街では唯一営業している小さな喫茶店で、香奈子は順也の母と対面した。

約束の時間五分前に到着したにも拘わらず、冴子は既に来ていた。けして広くはない店内の奥まった窓際のテーブル席に座り、ぼんやりと外を眺めていた。

「遅れて申し訳ありません。」

恋人の母に初めて逢うときの服装について、香奈子は悩んだ。何しろ香奈子の持っている服といえば、量産店で買うような一着千円のTシャツやジーンズばかりだ。そのために給料をはたいてデパートでスーツも買った。

淡いピンクのタイトスカートとジャケット、順也が誕生日にくれた一粒のコットンパールのネックレスを合わせた。しかし、子どもの幼稚園の入園式に似合いそうなそのスーツも、順也の母が纏う明らかにブランド物らしいワンピースを見ると、何とも安っぽく見えたものだ。

四十八歳になると聞いていたが、冴子はまた香奈子の母とは違う意味で、若々しかった。女らしい美しさというよりは、いかにも仕事のできる女として輝いているというタイプだ。ショートカットの髪は染めているのか白いもの一つなく、細い眉の下の切れ長の瞳は順也にうり二つだった。

窓辺から差し込む秋の陽光に、小さなダイヤのピアスが燦めいていた。

冴子の前にはクリスタルの灰皿があり、そこには吸い殻が幾つもできていた。

「一本当にお待たせしてー。」

なおも謝罪しようとした香奈子を手で制し、冴子はぞんざいに顎をしゃくった。

「そこに座りなさい。」

初対面にしては随分と権高な態度ではあった。他人に対して命令し慣れている人だけが持つ傲慢さがその口調にも表情にもよく現れていた。

注文を取りにきたのは顔見知りの中年の店主だった。冴子は

「冷たいコーヒーで良いわ、あなたも同じもので良いわね？」

早口で言い、店主が去るのを待っていたように口を開いた。

「私も忙しいの。明日の朝にはロスの支社に向けて飛ばなければならないので。」

暗に、こんなところで、あなたのような女の相手はしてられないと言わんばかりの口調だった。

「単刀直入に言うわ。順也と別れて。もちろん、無償(タダ)でとは言いません。」

冴子はこれもブランド物らしいバッグを開き、茶封筒をテーブルに置いた。

香奈子は順也の母をテーブル越しに真っすぐに見つめた。

「これは、どういう意味ですか？」

冴子がフフと意味深な笑い方をした。

「何も知らない初(うぶ)なフリをするのは止めることね。息子はその手で騙せても、私は騙せなくてよ。」

香奈子は茶封筒をしばらく見ていた。厚みのあるそれが「手切れ金、であろうくらいのことは想像はついた。

耐え難い怒りが刹那、香奈子の中で渦巻いた。大好きな彼の母親でなければ、店主が置いていたグラスを傾けて、頭から水を引っかけたいほどだった。

「こんなものを頂くいわれはありません。

視線をいささかも揺るがすことなく言えば、冴子には「身の程知らずの生意気な娘、と映じらしい。

「不満なの？

その意味は理解していたけれど、香奈子は恐らく冴子が期待していたのとは違う応えを返した。

「不本意なのは封筒の中身についてではありません。自分がその程度の人間だと思われ、扱われたことです。

だが、またもやここで冴子は見当違いのことを言った。

—その中には、百万あるわ。まさか、自分にそれ以上の価値があるとでも思っているの？

その時、店主がアイスコーヒーを運んできた。二人の女たちの間に漂う剣呑な雰囲気を感じたのか、店主は早々に奥へ引っ込んでゆく。

気まずい沈黙が満ちる中、冴子が溜息をついた。

—末恐ろしい娘だこと。良いでしょう。二百万用意するわ。後の百万はあなたが指定する口座に振り込んであげるから、ここに連絡して。

またもや差し出された小さなカードには「堂本電機 代表取締役 堂本冴子」と印刷されている。小さな名刺の周囲は金で縁取りされた瀟洒なものだ。冴子はボールペンで裏に「沢口吾郎」と書き、更にその下にEメールアドレスと電話番号を書いた。

—秘書なの。私の連絡先にではなく、ここに連絡してちょうだい。

その後続く言葉を香奈子は聞き逃さなかった。

—二百万で厄払いできるなら、安いものだわ。

「厄払い、のひと言が香奈子の辛うじて残っていた自尊心と理性を粉々に打ち砕いた。

—私はあなたの息子さんに取り憑いた厄払いしなければならない不幸だということですか？

声が、震えた。

冴子は事もなげに言い棄てた。

—災いでなければ何だというの？ あなたのせいで、息子は二学期からは一日たりとも大学に行っていないのよ？ どうせ、あなたが息子を引き止めて行かせないようにしているんでしょう。その中、上手いことやって子どもでもできてしまえば、堂本の嫁になれるとでも思ってるんじゃないか？

あんまりだと思った。何故、自分がこの権高で人を人とも思わないような女にここまで言われなければならないのだろう。

香奈子は厚みのある封筒から冴子に蔑むような視線を移した。

—お金は怖いものだと、今日初めて知りました。あなた方のように百万単位のお金を右から左へと自在に動かしている人たちは、人間らしい心さえも麻痺してしまうみたいですね。

私は、と、香奈子は小さく息を吸い込んで冴子を見つめた。

—順也さんを愛しています。その気持ちはお金なんかには換えられるものではありません。念のために申し上げておきますが、私は順也さんに大学に戻るように何度も言いました。

その先は言わなかった。冴子が真っ赤なマニキュアに染まった指先を神経質にテーブルに打ちつけた。氷が溶けて生温くなったアイスコーヒーをひと口飲んで、思いきり顔をしかめる。

—良いこと、あなたと順也は、私の息子は、この水で薄めたようなコーヒーと高価な豆を挽いてドリップしたコーヒーと同じなの。私や息子は普段から、外国産の豆を挽いたものを専門店で購入していて、コーヒーはそれしか飲まないわ。あなたが飲むのはそこら辺のスーパーで売っている安物のインスタントでしょう。今は珍しいから、夢中になっているだけ、すぐに飽きて元の世界に戻りたくなる。そうなる前に、このお金を受け取って息子を解放してやるのがあなた自身のためにも良いのではなくて？

所詮は住む世界が違うと言われたも同然だった。香奈子は唇を噛みしめると、今度こそ言った。
一息子さんが大学に戻らなかったのは、彼自身の意思です。私は一度として引き止めたことはありませんから。

事実だけを述べ、香奈子は立った。

一失礼します。

と、丁重に挨拶して店を足早に出た。だから、冴子がどのような表情をしていたのかは知らない。知りたくもなかった。

恐らく初対面で彼の母の自分への評価が更に落ちたであろうことは想像に難くなかった。けれど、果たして、これ以上下がりようがあるのだろうか。疑問に思うほど、彼の母の態度は酷かった。

というより、冴子は香奈子を一人の人間としてすら認めていなかった。

—その中には、百万あるわ。まさか、自分にそれ以上の価値があるとでも思っているの？

冴子の言葉が何より彼女の価値観を物語っていた。

大体、一人一人の尊厳に対して数字で評価など、できるはずがない。それを平気でやってしまうところが、特権階級意識を家宝のように大切に守っている人たちの怖いところだった。

あの科白を口にした時、冴子は香奈子だけではなく、自分自身の尊厳さえも傷つけ貶めたことに気付いていない。人ひとりの価値を金銭で表そうとしたそのことが自分の人間としての醜悪さ、低俗さを示していることを理解していないのだ。

あれから一年以上経った今でも、彼の母に投げつけられた言葉の礫(つぶて)は、思い出す度、香奈子の心をズタズタに傷つける。これ以上はないほど貶められたのは二十二年の生涯で初めてのことだった。

順也には、あのときのことは話していない。呼び出されたそのときから、冴子は息子には絶対に言わないようにと言っていた。けれど、香奈子が順也に話さなかったのは、冴子のためではない。

どんなに厭な女であろうと、堂本冴子は順也の母であった。香奈子は今でも順也を大好きだ。いや、夫婦同然に暮らして一年間、もっともっと好きになった。今では彼のいない人生なんて、考えられないほどだ。

自分の母親があんな恥知らずな行いをしたと知れば、順也は哀しむだろう。だから、順也には冴子とのやりとりは一切告げなかった。

冴子との接点は後にも先にも、その一度きりだった。十月だというのに、少し歩いただけで汗がスーツのジャケットの下をつたうのが判るほど暑い午後だった。

香奈子はコーポラスに帰って、一人で泣くだけ泣いた。順也はその時間帯はバイトに出ているのは判っていたから、一人きりで好きなだけ泣くことができたのは幸いだった。

—三流高校卒で、コンビニ店員のどこが悪いの？ 私は自分で自分に誇りを持っている。

順也の母に投げつけられた言葉は香奈子だけでなく、香奈子を女手一つで一生懸命育ててくれた母への冒涇でもあった。香奈子が許せなかったのは香奈子を否定したことで、大切な母をも貶められたと思ったからだ。

帰宅後、順也の母との初対面用にと買ったスーツは次のゴミの日に出した。一万五千円もするスーツは勿体ないと思えたけれど、彼の母の悪意に染まったような気がして、これから先も見ただけで厭な思い出が甦ってくるだろう。

随分と長い物思いに浸っていたのかもしれない。

「一な子、香奈子？」

順也の声が耳を打ち、香奈子は唐突に現実に戻ってきた。冴子との対面の後、香奈子は順也と話をした。もちろん、大学のことだ。順也はこのまま無届けで、いずれ退学になっても構わない

と言い張ったものの、ここだけは香奈子も譲らなかった。

一休学届けを出してちょうだい。

順也は渋ったが、最後には香奈子が
一届けを出さないのなら、今すぐに別れる。

と言い出したことで、渋々頷いた。もちろん、確かめたりまではしないが、順也のことだから、約束を守って休学届けは出したと思う。とりあえず、これで大学に戻る道だけは確保できたことになる。

もちろん、これも彼の母のためではない。順也自身の将来のためだ。香奈子は元々成績も良くなかったし、特に勉強が好きではなかったから、大学に行きたいとは思わなかった。それでも、クラスメートの大半が短大や大学へ進学した中で、就職する生徒はわずか数人、大学に行ったらお洒落や彼氏を作って目一杯愉しむと張り切っている友達たちの輪には入れなかった。

順也は頭も良いのだし、折角、有名な大学に合格して卒業まであと二年というところで辞めるのはあまりに惜しい。いずれ堂本電機を継ぐにしても継がないにしても、大学の法学部で得た知識は彼にとって、あらゆる局面で役立つに違いない。

順也が心配そうに香奈子の方を見ている。

「どうかしたのか？ 黙り込んでから、ずっと上の空みたいだけど」

「ううん、大丈夫。あんまり暑いから、疲れが出たみたい」

香奈子は無理して微笑んだ。と、順也がふいにブレーキをかけ、急停車した。今夜は頼りなげな三日月が紫紺の空に掛かっていて、深い夜の闇が辺りを包み込んでいる。深いブルーの車は、ともすれば周囲の闇に溶け込んでしまいそうな覚束無い存在感だ。

順也は路肩に車を停めた。暑いので、エンジンは切らない。

「本当に大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫。そんなに私、いつもと違ってた？」

香奈子が問えば、順也は即座に頷いた。

「車に乗ってきたときは、いつもよりよく喋るくらいだったのに、急に黙り込んで、俺が話しかけても上の空だし」

「ごめんね。ホントに何でもないから、大丈夫」

「香奈子、俺に隠し事なんて、してないよな」

「うん、もちろん、順也君に隠し事なんかしてないよ」

香奈子が笑顔で言うのに、順也も満面の笑顔で頷いた。

「なら、良いんだ。俺たち、夫婦も同然なんだから、お互いに隠し事はナシだぞ？」

「そうだね。順也君もね」

「もちろんだ。俺だって、お前に嘘は言わない」

順也が大真面目な顔で言い、ジーンズの後ろポケットから何か取り出した。今日の彼のいでたちは、お気に入りの黒のTシャツとブルージンズだ。Tシャツは今、流行りのロゴ入りで、`男前、と白い文字が踊っている。一普通、こういうTシャツは着る人を選ぶというのか、よほどルックスに自信があるか、あったとしても着こなせる人は少ない。

文字通り`男前(イケメン)、であったとしても、嫌みになるからだ。しかし、彼がやってしまうと、これが何故か嫌みにもならず、さらりと自然に決まってしまう。よくモデルはどんな服でも着こなすというけれど、彼の場合も同じなのかもしれない。

カジュアルでも、めかしこんでも、ついでにいえば安物であろうが、高級ブランドであろうが、難なくサマになってしまう羨ましい美男だ。

「これ、急いで渡さないと、日付が変わってからじゃヤバイもんな」

差し延べられた彼の手には、淡いピンク色の小箱がちょこん、と乗っている。大きな彼の手のひらに、その箱は余計に小さく可愛らしく見える。蓋には同色のオーガンジーのリボンが貼り付けられている。

「ハッピーバースデー、香奈子」

そのひと言に、香奈子は眼を見開いた。

「そっか。今日は誕生日だったんだ」

香奈子は破顔した。

「いやねえ、自分の誕生日も忘れてた」

順也が少し怖い顔になる。

「コンビニの仕事で一生懸命になるのが悪いとは言わないけど、ほどほどにしとけよ。健康第一だぞ」

と、年下とは思えない口調で言う。

香奈子は笑った。

「やっとまた順也君より二つ年上になれたのね」

去年の夏、出逢った時、香奈子は二十二歳、順也は二十一歳、大学三年だった。八月生まれの香奈子は順也より先に誕生日を迎えるため、しばらくは一歳違いではなく、二歳違いになる。もっとも、順也が十二月に誕生日を迎えるまでのわずかな間ではあるけれど。

「姉さん女房、か」

順也がどこか嬉しげな口調で言った。

「年上の女なんて、つまらないわよね」

香奈子が半ば本気で不安げに言うのに、順也が眼をくるっと回した。

「知ってる？ 年上の女房は金の草鞋を履いても捜せだって」

「なに、それ」

順也が得意げに鼻をうごめかす。

「昔の諺で、年上の奥さんはそれほど男にとっては価値があるってことだよ」

まるで親に褒めて貰いたい悪戯っ子のような表情に、香奈子は一緒に暮らし始めてもう一年にもなるというのに、胸がときめいてしまう。

順也といっても、本当に飽きるということがない。この頃はお互いに仕事が忙しくて、なかなかデートもできないし、家で一緒の時間を過ごすことも少なくなった。それでも、順也とはいつ、どこにいても心は繋がっていると香奈子は信じていた。彼もまた香奈子と同じ気持ちでいてくれると信じている。

「でも、年上の女のどこが良いのかしら」

呟くと、順也がすかさず言った。

「男の好きなようにさせてくれるところ！」

言い終わらない中に運転席からのしかかってくる。

口づけられる一。そう思った瞬間、眼を閉じていると、順也がパッと身を離れた。香奈子も慌てて身を起こす。と、車の外を三人の男子小学生がこちらを振り返りつつ、ガッツポーズで走り去るのが見えた。

子どもたちはニヤニヤとしながら、しきりに手を振っている。

どうも、側を通り掛かった小学生に窓越しに見られていたらしい。大方、この時間なら塾帰りだろう。車はそれなりに通るが、そろそろ九時を回ろうとしているから、滅多に人は通らない。

「最近のガキはませてるな」

順也がぼやくように言い、香奈子は微笑む。

「丁度良かったじゃない？」

「何で？ 良いところを邪魔されたんだぞ」

真剣にむくれたように言う順也に、香奈子は笑い出しそうになるのを堪えなければならない。

「だって、順也君がくれたプレゼントを早く見たいんだもの」

「そっか」

と、プレゼントよりはキスのことしか頭になかったような彼である。

香奈子は小さな箱をそっと開けた。中から現れたのはシルバーのリングだった。細い紐をねじり合わせたようなデザインで、ねじった右側部分に小さなジルコンが幾つも散りばめられ、左に小さなサファイアが嵌め込まれている。

順也がどこか照れたような口調で言った。

「安物で申し訳ないんだけどさ。今の俺のサラリーじゃ、その程度しか買ってやれないんだ」

「そんなこと、全然ないよ。ありがとう、何と言ったら良いのか」

香奈子は突如として熱いものが込み上げてきて、言葉を失った。

順也が焦ったように言う。

「ど、どうしたんだ！ 婚約指輪にするには、あまりにも安物すぎるから辛くなったとか」

だよな、三千五百円なものな、と、正直すぎる彼の呟きが聞こえてきても、香奈子の涙は止まらなかった。これが他のことなら、大笑いするところなのだが。

「そうだよな、女にとっては一生に一度の記念日なものな」

順也は一人で呟き、一人で落胆している。

「俺としたことが、とんでもないことをしたよ。ごめん、香奈子。でも、今はこれで我慢しておいてくれないか、いずれ必ず、ちゃんとした本物のダイヤモンドを贈るから」

けれど。香奈子の耳には順也の言葉は聞こえていなかった。`婚約指輪、` `一生に一度の記念、`という一部分だけが頭の中でぐるぐると回っていたからだ。

「順也君、今、何て言ったの？」

え、と、順也が眼を瞠った。

「婚約指輪って言った？」

恐る恐る訊き返すと、順也は当然という表情で頷いた。

「ああ、言った。この間さ、香奈子の誕生日プレゼントは何が良いかなって考えてて。とびきりの日にしたいなと思ってんだ。だって、一年前の誕生日は付き合ってたし、たいしたものはやれなかったから」

そこで、順也は照れくさそうに頭をかいた。

「けど、よくよく考えたら、今の俺、本当に金ないし。女が欲いそうなプレゼントといたら、当然、指輪とかネックレスとか、そっち系だろうけど、到底、一生ものになるような高いものは無理だなんて。そうしたら、自分が今までちゃんと香奈子にプロポーズしたことがないのに気付いてさ。夫婦みたいだとかはよく言うのに、ちゃんとした求婚をしてないっていうのも何かなあ、やっぱり女はそういうところはちゃんとケジメつけて欲しいって思ってるだろうと思ったんだ。順序が後先になって申し訳ないけど」

順也は笑った。

「だから、いっそのこと誕生日とプロポーズを同時にやっちゃったら、一生の記念に残る日になるんじゃないかっていう安易な考え。指輪の方は到底一生ものじゃないが、俺も正社員になったら、それこそ一生ものの指輪を買ってやれるから、それまで待っててな」

香奈子は眼尻に滲んだ涙を人差し指で拭った。

「つまり、出世払いってことね」

「そう、その出世払い」

順也が嬉しげに笑い、それでもなお心配そうに訊ねた。

「だけど、やっぱり、がっかりしたんだよな？ 泣くほど辛かったんだから」

香奈子は微笑んだ。

「違うよ、涙が出たのは嬉しかったから」

「ええーっ」

と、順也は口を尖らせた。

「だって、自分でも忘れてた誕生日を順也君に祝って貰えるなんて想像もしてなかったし、その上、エンゲージリングだって言われたから」

彼への愛しい気持ちが溢れてしまいそうだった。そう、この時、香奈子は自分の気持ちが怖いとさえ思ったのだ。

一こんなに誰かを好きだ、離れたくないと思うことが実際にあるなんて、考えてもみなかった。

もし、順也がある日突然、離れていたら、自分はどうなるのだろう。今の彼を見たら、あり得ない未来ではあるけれど、そのときの香奈子の耳奥でいつかの順也の母の言葉がリフレインした。

一今は珍しいから、夢中になっているだけ、すぐに飽きて元の世界に戻りたくなる。そうなる前に、このお金を受け取って息子を解放してやるのがあなた自身のためにも良いのではなくて？

あの日、順也の母は、はっきりと告げた。二人は住む世界が違うと。

「エンゲージリングか。改めて口にすると、何か気恥ずかしいな」

順也が今更なのに、頬を上気させる。ルックスはどこか混血(ハーフ)めいた美男子ながら、中身は割とこの年代の男の子にしては古風な彼は、そんなことを言う。実際、彼はまだ小学生の頃から、よく外国人と日本人との間に生まれたハーフと間違えられたという。

もちろん、彼の両親は正真正銘の日本人であるにも拘わらずだ。

確かにサラサラとした茶褐色の髪と瞳、日本人離れたした彫りの深い端正な容貌と並外れた長身、長い手足を持つ彼はイケメンとはいえ、滅多にいないようなタイプだ。

見た眼は日本人離れした端正な今風のイケメン、中身は純日本人、こういったギャップも香奈子にとっては順也の魅力に思えた。

「ありがとう、順也君。大切にするね」
香奈子が微笑んで言うと、順也はまだ紅い顔で頷いた。そう、二人だけのときに迫ってくるときは香奈子でさえ愕くほど大胆なのに、時として照れ屋になるところも大好きだ。

要するに、香奈子は順也のすべてが一丸ごと大好きなのかもしれない。

それから十五分程度で、順也の運転する車はコーポラス前の駐車場に入った。二人が暮らすのはマンションというにはいささか、おこがましい、アパートよりは少しマシなコーポラスだ。H駅からは車で三十分かかるから、けして交通の便が良い場所とはいえない。が、陽当たりが良く、その割には地の利を考慮してか月々の家賃が格安なのだ。

家賃は今のところ、香奈子が三分の二、順也が三分の一支払っている。最初の数ヶ月はそれも香奈子はすべて出していた。元々、香奈子が暮らしていたのだから、特に不満はなかったのだが、やはり順也としては男の沽券に拘わるらしかった。

とはいえ、自動車工場のバイトと回転寿司屋のバイトを掛け持ちしてもなお、正社員のの香奈子の収入には及ばない順也に家賃を折半するというのは土台無理な話だ。なので、光熱費、水道代、食費と現在はすべて香奈子持ちになっている。

一度、高校時代からの親友と休日にランチした時、その話をしたら呆れられた。彼女は交遊範囲が狭く、友人も少ない香奈子にとっては唯一、本音で語り合える女友達だった。ちなみに、その子は短大に進学して、今は都市銀行の窓口業務をしている。

就職してから、同じ行内の若手行員と恋愛中だとかで、結婚を意識した付き合いだとも聞いた。

その親友祐理香は眉をひそめた。

一それって、いわゆるヒモ男じゃない？

一そんな、順也君はヒモなんかじゃないよ。

幾ら親友でも大切な順也のことをそんな風に言うのは許せないと思ったものだったが一。祐理香は真摯な面持ちで言った。

一私は香奈子のごことが心配なのよ。香奈子は昔から一途な子だったもの。その順也君っていう人が好きなのは判るけど、要するに、その男が出してるのは家賃だけでしょ。それも折半っていうなら納得だけど、三分の一で、しかも他の経費は全部香奈子が出してるっていうし。幾ら何でも、それは虫が良すぎる話じゃない？

祐理香の言葉はある意味では真実だった。順也自身、家賃は出そうと何度も言ったけれど、他の経費について自分が払おうと言ったことは一度もないのだ。祐理香はこんなことも言った。

一別に彼氏自慢するわけじゃないけど、私と井藤君はデートのときは、いつも井藤君が出してくれるのよ。もちろん、私は払うって言うんだけど、女にそんなものは払わせられないって彼が言うの。だからかもしれないけれど、何か香奈子の話を聞いてると、しっくり来ないなあ。その順也君って人、香奈子に甘えすぎじゃないかと思う。

その時、香奈子はこう反論した。

一順也君はまだ学生だから。祐理香の彼はちゃんとした社会人でしょ。

しかし、心の底では判っていた。そして、現実的な祐理香は痛いところを突いてきた。

一でもね、香奈子には悪いけど、彼は大学に行っていないのよね？ 香奈子と同棲してもう一年なのに、どうするつもりなのかな。早いところ、籍を入れて本腰を据えて働き始めるとか、そういう気持ちにならないのかしら。このままじゃ、香奈子、将来が見えないよ。もし、その順也って人が心変わりしたら、どうなるの？ 香奈子は貢ぐだけ貢いで、男の面倒を見させられて、そ

れで終わりだよ。

その後で、祐理香は謝った。

一ごめん、言いすぎた。でも、本当に香奈子の方が心配だから、言うの。とにかく、入籍だけでもしちやいなよ。一度、将来について、はっきりと話し合った方がよいよ。

香奈子も祐理香の気持ちはよく理解できた。親友だからこそ、ここまで直截に忠告してくれているのだ。

一判った。一度、話してみる。

そこで話は終わった。もちろん、祐理香にはそう言ったものの、順也とは入籍云々について話したことはない。一緒に暮らし始めて一年が近くなり、これまでも不安にならなかったといえは嘘になる。それは何も祐理香に言われたからではない。

大学を休学して一年、順也は確かに朝と昼と掛け持ちでバイトして、懸命に働いている。しかし、では、自分たちの将来について何を考えているのかと想像すると、それは何ともいえなかった。

彼もいずれ香奈子と家庭を築きたいと思っているというのは、今日も車の中で彼が言葉にしたとおりだ。それでも同棲して一年になるというのに正規の仕事につかず、バイト暮らしだということ、二人の間に「結婚」という二文字が一度も出ないということは不安材料としては十分ともいえた。

もっとも、彼に言わせれば、昼間バイトしている自動車工場の正社員になりたいのだそうで、ならば他に夢を諦めてまで正規の仕事を探そうという気にならないのも判らない話ではない。

コーポラスのすぐ前の駐車場に車を止め、二階へと直接続く階段を昇る。コーポラスは二階まであり、それぞれの階に五部屋あった。香奈子と順也が暮らすのは二階の左から三番めの部屋である。

香奈子がバッグから鍵を取り出し、「二〇三」と扉に記された木製の扉を開けた。香奈子に続いて順也も入ってくる。

二間しかない我が家ではあるが、大好きな男と住めば、世界中のどんな場所よりも素敵な居場所だ。入り口は板の間の台所に続き、奥の部屋が居間兼寝室になる。香奈子はまず台所の灯りをつけると、奥の部屋に真っすぐに向かう。

まばゆい灯りが眼を射た瞬間、五畳しかない部屋の壁に貼り付けた大きなポスターが視界に入る。それは美しいウユニ塩湖の写真だ。どこまでも蒼い空には純白の雲が幾つも浮かび、その空をそのまま写し取ったかのような海にはやはり、白い雲が映り込んでいる。

南国の楽園、天上の奇蹟と呼ばれるミクロネシアのウユニ湖では、鏡張りといわれる至上の奇蹟のような風景が見られるという。もちろん香奈子はまだ写真でしか見たことがない。

でも、大好きな順也といずれ出かけるハネムーンには、絶対、このウユニ塩湖を訪れたいとひそかに考えていた。この美しいポスター自体、デパ地下の雑貨屋で見つけたものだが、一枚千円もした。ポスター一枚に千円もかけるなんてと自分でも思ったし、順也に見せても、くだらないと笑われただけだったけれど、これだけは欲しかった。

この美しいポスターを見て以来、香奈子は高校卒業後から今まで貯めた結婚費用の半分を旅行資金にして、それを元に新しい口座を作った。もちろん、順也とウユニ湖へハネムーンに行くときのためのお金だ。だが、このポスターを見たときの順也の反応がイマイチだったので、ハネムーンのことはいまだに言い出せないでいた。

それでも、このポスターを見る度に、香奈子はその日一日の疲れも吹き飛んでいった。順也その人から結婚について具体的な話が一度も出ない状況では、このポスターを見て彼と訪ねるウユニ塩湖の美しい眺めを思い浮かべるひとときだけが香奈子にとっては「具体的な未来、を実感できたのである。

しかし、今夜、順也はついに香奈子にプロポーズをしてくれた。今夜の出来事をきっかけとして、自分たちの関係がより深まった、二人の将来に少し光が見えてきたといえるかもしれない。

「香奈子」

ポスターに見入っていると、ふいに背後から腰に両手を回され、引き寄せられた。順也はしばらく香奈子のポニーテールにした長い髪に鼻を押し当てている。

「良い匂いだ」

香奈子自身は無香料のシャンプーが好きで使っていたのだが、順也の好みだということで、彼と付き合い始めてからはフローラル系のシャンプーを使っている。

順也はしばらく髪の香りを嗅いでいたかと思うと、香奈子の身体をぐるりと回し、自分の方へ向かせた。彼の手がそっと香奈子の左手を握りしめ、薬指に填めたサファイアの指輪を愛しむように撫でた。

その仕種に、次第に官能的で淫らな色合いが濃くなってくる。

「順也君、先にお風呂に入ってきたら？ 汗かいたでしょ」

香奈子が言うと、順也が美しい双眸を眇める。その眼(まなこ)の底に欲望が閃いていると思うのは、香奈子の自惚れだろうか。

「香奈子も一緒に入ろう？」

「私は後で良いよ」

順也は時々、一緒にお風呂に入ったり、シャワーを使いたがる。ここのコーポラスの良いところは、小さいながらバストイレつきでもあるところだ。

だが、正直、香奈子はそこまでしたいとは思わない。順也とのセックスだから好きなのであって、行為そのものがそれほど好きというわけではないのだ。ただ二人で寄り添っているだけの時間がいちばん良い。ただ、若い盛りの順也はそれでは満足できないらしく、たまに二人で自宅にいられるときは、始終、身体を求めてくる。

「その間、香奈子は何をするの？」

案の定、順也が不満げに問うので、香奈子は正直に応えた。

「ウユニ湖の写真を眺めてる」

順也がクスリと笑った。馬鹿にしている一とまではゆかなくとも、鼻を鳴らすような厭な笑い方だ。

「そんなものを眺めたって、面白くも何ともないよ。それよりも二人でシャワーしよう？」

何故だろうか、そのときの順也の笑い方に抵抗を憶え、香奈子は彼の手を振り払った。

順也がウユニ湖に興味がないのは知っているが、何か自分の大切にしているものまで蔑ろにされたようだ。

「私は後で入るから」

言外に今はいやだと言ったつもりだった。

だが、その夜は順也も引き下がらなかった。

「じゃあ、シャワーは後で良い。さっき小学生に惜しいところで邪魔されたから」

順也の声がいつもより濡れている。そのまま勢いで畳に押し倒され、香奈子は抗議の声を上げた。

「順也君、私は今はいやだってー」

だが、真上から覆い被さってきた彼に両手を掴まれ、持ち上げて縫い止められた。

間近で二つの黒い瞳が見つめ合う。ほどなく熱い唇にしっかりと唇を塞がれ、香奈子は烈しい口付けに我を忘れていった。

シーンII すれ違い

シーンII すれ違い

香奈子はバッグからスマホを出した。今、午後四時五分を少し回ったところだ。既に映画の上映開始時間を過ぎた。もう、これで時間を確認するのは何回目になるだろう。

四時十分になったところで、香奈子は仕方なく劇場内に脚を踏み入れた。既に映画が始まっているため、場内は当然ながら暗い。覚束無い足取りでゆっくりと進み、真ん中の前から五列目の左端の席に座った。

この映画は中国で昨年上映され、大人気を博した時代劇だ。ヒーローとヒロインの一途な熱愛と悲恋物語が大人気で、日本でも全国で封切られるや、多くの観客を動員している。香奈子は特に時代劇や歴史に興味があるというわけではない。しかし、話題作なので、一度は見てみたいと思っていた。

幸いにも隣町のI駅前の劇場でこの映画が上映されると聞き、今日は順也と二人で見ることにしたのである。

香奈子の誕生日から十日が過ぎていた。今日は水曜で、コンビニの仕事も朝七時から午後一時までだ。映画は四時からなので、一旦コーポラスに戻り、シャワーを浴びてから着替えてメイクを直して出てきた。今日はパンツ派の香奈子には珍しく、スカートだ。順也がジーンズよりはスカートを好むので、どうしてもデートのときは彼の好みに合わせてしまう。

ワンピースは涼しげなキャミワンピで、細い肩紐がついている。胸許にギャザーが入り、全体的な色はオフホワイトに蒼色と紅で水彩画風に大きな花がプリントされている。肩を出すデザインのため、上に淡い水色のニットボレロを羽織った。

順也は香奈子が必要以上に人前で膚を露出するのを嫌がる。
—自分の女を他の男が嫌らしい眼で見るのは我慢できないんだ。

と言っているが、その割には町で見かけた若い女の子が脚や肩を露出させた大胆なファッションをしていたら、結構興味津々で見ている。まあ、それが男という生きものかもしれないが。

浴室の鏡の前で背中まで届く長い髪をブローしながら、ふと一年前の自分を思い出してみる。順也と出会った頃、香奈子の髪はここまで長くなかった。肩に届くか届かないかのボブだったのだ。それが順也と付き合うようになって、彼の好みに合わせて伸ばし始めた。

ヘアスタイルも使うシャンプーも、考えてみれば、今までの自分の好みを諦めて順也の好みに合わせている。

けれど、自分が順也の趣味に合わせるほど、順也は香奈子に合わせてくれているだろうか。例えばウユニ湖の写真一つでも、そうだ。たとえ関心がなくても、相手の気持ちを思いやって時には話を合わせるくらいはしても良いのではないかと思う。

それが、人生を共に生きるということではないのか。恋愛というのは、けしてどちらか一方ばかりが我慢したりするものではない。ましてや、結婚生活で無理は長続きしない。どちらもが少しずつ譲り合ってこそ成り立つものだろう。

まだ結婚したことはなくても、既に順也と同棲して一年になる香奈子はこの頃、少しずつ、そういうことが判りかけてきた。メイクも控えめなのが好みだったけれど、順也は少し濃いめを好むので、口紅もアイシャドウも濃く入れて、昔は使わなかったマスカラまで使う。

コンビニで働いているときは殆どノーメイクで、しかもお仕着せ姿だから、随分と印象が違う。鏡に映った女は、自分でも自分ではないみたいな気がする。だが、順也は、こういう女の子が好みらしい。

仕上げに全身が映る鏡でチェックしてから、出かけた。ボレロは着たし、ワンピースはマキシ丈なので、脚も見えない。サンダルはこれも順也の好みの細い紐を足首でリボン状に結ぶ白くてヒールの高いものだ。正直、このデザインも香奈子の好みではなかった。香奈子は元々、ユニセクスの、男性でも女性でもはけるようなサンダルが好みで、ここまで女性らしいデザインは好きではない。

右脚首にはこれも繊細なチェーンに光る小さな石がついたアンクレットをつける。これも順也の頼みだった。何故か身体を重ねるときも、順也は香奈子にアンクレットを付けさせたままでしたがった。何も身に付けていない香奈子にアンクレットだけ付けさせるのが気に入っているらしい。

これもよく理解できない趣味だが、特に嫌というわけではないので、順也の言うとおりにしている。

H駅からI駅までは電車の駅で四つ、二十分程度で着く。劇場の入っているスーパーは駅の前だから、歩いて五分もかからない。

結局、順也が来たのは二時間の映画が終わる数分前だった。そのお陰で、香奈子はあれほど見たいと楽しみにしていたのに、内容も殆ど憶えていないほど、映画に集中できなかった。

順也は最初から、この映画を見るのに乗り気ではなかった。だから、わざと遅れてきたのではないか。そんなことまで邪推してしまった。

いざ彼が現れたら、文句を言ってやろうと思っていたにも拘わらず、順也に面と向かって謝られると何も言えなくなった。

こういうところ、順也はとても立ち回りが上手い。甘え上手とでも言えば良いのか。くどくどと言いつつ謝る前に、さっと謝ってしまう。

香奈子が何か言う前に、まるで仏さまを拝むように手のひらを合わせ、心底申し訳なさに謝る。

「ごめんな」

香奈子にはもっと言いたいことがあったはずだ。例えば、一久しぶりのデートだから、順也君の好みに合わせて目一杯お洒落してきたのに。

とか、

一この映画って、あまり面白くなさそうだって言ってたよね？ だから、すっぽかすつもりだった？

とか。

だが、現実に順也がしょげた様子でいると、責める言葉も引っ込んでしまうのだから情けない。結局、いつものように笑顔で彼を許してしまう自分が嫌だった。きっと祐理香が見たら、一香奈子は順也君に甘すぎる。

と、渋い顔をするに違いない。香奈子自身、自分はどうも順也に弱いというか甘いという自覚はあった。

もちろん、こんなことは初めてで、デートで待ち合わせた時、彼が遅れたことはない。しかし、それをいえば、デート、いや外食でさえ、互いの仕事が忙しくなったためにもう三ヶ月はしていない。だからこそ、支度にも時間をかけて念入りに仕上げてきたのに。

「三ヶ月ぶりのデートだから、これでも気合いを入れてきたのよ？」

少し冗談めかしているのが精一杯だ。本当はもっと言いたいことがあるのだが、順也の心底しょげた顔を見ていると、何だか自分の方が逆に悪いことをしたような気になってしまう。

「おっ、このワンピースは初めて見るな。もしかして、今日のために買ったとか。凄く似合っ

てる」

こういうところは、流石は現代っ子だ。女性を褒める言葉を出し惜しみはしない。

香奈子は少し白けた視線で順也を見てやった。

「あのね、このワンピースは去年の夏の終わりにセールで買ったヤツ。だから、少なくとも三回くらいは順也君が見てるはずだよ」

「うっ、そ、そうか？」

流石にまずいと思ったのか、彼は頭をかいた。

「最近、記憶力が鈍ったか、俺」

香奈子は溜息をつき、順也の左腕にぶら下がった。

「もう！ 本当にしょうがないんだから。愉しみにしていた映画なのに、全然物語りが頭に残ってないよ」

順也が少し嬉しげに言う。

「俺が側に居なくて淋しくて、映画どころじゃなかったってか？」

香奈子は今日これで十数回目になる溜息を思いきり吐き出したのだった。

「あのね、順也君は自分が幸せな男だと思ったことない？」

幸せというよりは、おめでたい、身勝手という言葉の方が言い得て妙だとは思ったが、流石にそこまで言わない。

「そりゃ、香奈子みたいな良い女と暮らせるるんだから、俺は幸せ者だね」

「調子良いんだから」

香奈子はいつまでも怒っているのも馬鹿らしくなり、順也に言った。

「ね、遅れた埋め合わせに今夜は順也君の奢りね」

「おう、それで行こう」

順也も笑顔で頷き、二人は映画館を出て、順也の車で1町の高台にあるレストランに向かった。

。

その高台は海水浴場がある浜辺をその懐に抱くようにそびえている。高台にはイタリアンレストランがあり、特にシーフードパスタやドリアが美味しいという評判である。

幸いにも窓際の席が一つだけ空いており、二人は眺めの良い場所に座ることができた。

夜のことで、海辺には何も無いが、逆方向の町は無数の灯りがキャンドルのように揺らめき、またたいていた。

「綺麗」

香奈子は今度は感嘆の溜息を吐き出す。

順也が愉快そうに言う。

「女って不思議だよな。夜景とか見て、綺麗だって眼を潤ませるんだからな。男から見たら、あんな面白みのないものを見て、どこがそこまで感動するのかなって首を傾げたくなるけど」

香奈子は順也を軽く睨んだ。

「何かその口ぶり、前にも同じシチュエーションがあったみたいね」

順也が狼狽えたように手をぶんぶん振る。

「まさか、そんなことがあるはずないだろ」

「どうだか。慌てるところが怪しいわ」

香奈子が意味深な眼で見るのに、順也は肩を竦めた。

「そりゃ、香奈子の前に付き合ってた彼女はいたよ」

「何人くらい？」

「ええと、中学生のときに一人、高校のときは二人、大学に入ってからは一」

もしかしたら、ある程度は真実なのかもしれないが、半分は香奈子をからかうつもりなのだろう。だが、冗談にしては質が悪すぎる。

香奈子はやや高い声で言った。

「止めて！」

自分でも予期できないほど大きな声は静かなレストラン内に異様に響き渡った。

静かなムード音楽が流れる中、ほとんど満席だった他のテーブル席の客たちがちらほらとこちらを見ている。興味ありげな視線、咎めるような視線にさらされ、香奈子は居たたまれず、うつむいた。

順也が如才なく客たちを見回し、明るい声で言った。

「お騒がせして済みません」

その声で、漸く客たちの視線が逸れた。順也は小声で囁いた。

「香奈子らしくないぞ。こんなところで怒鳴ったりして」

香奈子は唇を噛みしめた。

「ごめんなさい」

「いや、俺も悪かった。香奈子に焼きもち灼かせたくて、ありもしない冗談言ったから」

順也がとりなすように言うと、香奈子は上目遣いに彼を見た。

「本当に冗談だったの？」

「おい、良い加減に絡むのは止めてくれ」

順也が辟易した顔になった。

その後はさんざんだった。折角注文したこの店名物のシーフードパスタの味もさっぱり判らない。今夜は映画も夕食もさんざんだった。

店を出て車に戻ってからの帰り道も、二人共に黙りこくっていた。順也は無言でハンドルを切り続け、香奈子はその隣で沈黙を守っていた。

どれくらいの間、走っただろうか。I町を抜けてH町に入ったところで、香奈子は呟いた。

「さっきは悪かったわ。人前で感情的になったりしては駄目ね」

「一」

順也は何も応えない。香奈子は頓着せず続けた。

「まだ怒ってる？」

ややあって短い返事が返ってきた。

「いや」

また、沈黙。その静けさに何故か押し潰されそうになり、香奈子は早口で言った。

「そういえば、今日は工場のバイトは二時までだって言ってたけど、何か急に予定変更でもあったの？」

映画に遅れたのもその辺りが理由だと見当をつけたのだが。

順也は端正な顔を一瞬、翳らせた。

「何だ、今度はまた終わった別の話を蒸し返すのか？ 今日のお前、何かしつこいぞ」

話題がなくて何気なしに口にしたらけれど、順也にとってはまた責められていると感じたのだろう。香奈子は慌てた。

「別に責めてるわけじゃないのよ」

順也はアクセルを踏み込んだ。車のスピードが上がる。今夜は月もない闇夜で、車は深い底なしの闇の中をひたすら走ってゆくようにも思えた。二人が向かう先には、今の道のように何の未来も希望もないのだろうか。

ひと刹那、そんな不吉なことを考えそうになり、香奈子は急いで馬鹿げた予感を追い払った。

相変わらず前方を見据えたまま、順也が低い声で言った。

「この間、生まれた先輩のところの赤ん坊がどうも調子が良くないんだって。それで、先輩が休みで、俺が穴を埋めてたんだよ」

「それは大変ね。赤ちゃん、生命に拘わるような病気なの？」

心から言うと、何故か順也の声に少しだけ狼狽が混じった。

「い、いや。そこまで深刻な話じゃないと思うぞ。マ、何日か経てば大丈夫だっていうようなことを先輩が言ってたから」

香奈子は頷いた。

「そう、それなら良かった。二ヶ月も早く生まれたのなら、まだ身体の機能もちゃんとできてないでしょうから、病気にもなりやすいのかもね」

順也が言った。

「もう気が滅入るような話は止めよう。久しぶりのデートなんだしな」

「そうね」

香奈子は素直に同意し、それからは雰囲気少し柔らかくなった。とはいえ、結局、その八月最後の夜は二人ともコーポラスに帰ってからもろくに話そうとせず、布団に入ったのだった。

映画に遅れた埋め合わせだと言って、順也が香奈子を改めて誘ったのは次の水曜日だった。丁度、気まずいままに終わったあの日から一週間を経ている。

カレンダーは既に九月を示しており、その日は九月になって最初の水曜日であった。日中はまだ三十度を超える真夏並の暑さだが、朝夕の風は幾分涼しくなり、特に夜にすだく虫の音(ね)は人が知らない中にうつろいゆく季節をはっきりと物語っている。

その日はからりと晴れ上がった蒼空がどこまでも続いていた。この一週間というもの、二人の間はやはり何となく、ぎごちない空気が張りつめていた。特に喧嘩をしたというわけでもないのに、互いに積極的に口を開こうとせず、今まではなかったことだ。

このままではいけないと思いつつも、口を開けばまた順也を責めるような言葉を口にして彼を怒らせるのではないか。不安が先に立ち、なかなか声をかけることができないでいたのだ。順也の方も似た気持ちだったのかもしれない。

最初に重い口を開いたのは順也の方だった。

—あさって、先輩が仕事を代わってくれたんで、一日休みが取れたんだ。良かったら、どこに行かないか？

香奈子はハッとした。順也の代わりに仕事に出られるほどならば、早産で生まれたという末子の健康状態も良くなったに違いないと思えたからだ。

—良かった、その先輩って、あの赤ちゃんが生まれたばかりの人でしょ。

訊ねると、順也は頷いた。

—ああ、奥さんが急に産気づいたときも俺が二日間、先輩の分まで働いたしな。多分、休みが貰えたのもそのお礼だと思う。

—良かった、じゃあ、赤ちゃんも元気になったのよね？

—え？

当惑を浮かべる順也に対して、香奈子は言った。

—だって一週間前、赤ちゃんの具合が良くないから、先輩が早退した穴を埋めるために順也君の仕事が長引いたって。

それで、映画に遅れたのではないかとはい、言わなかった。そこまで言えばまた口論になってしまう危険性があったからだ。

刹那、順也の整った面にわずかに狼狽が走ったのを、迂闊にも香奈子は見逃していた。

—あ、ああ、そうだったな。それはもちろん、大丈夫だ。

いかにもその話を早く切り上げたいとでも言いたげだったのは、その話をすれば恐らくは一週間前の喧嘩を思い出してしまうからだ。香奈子は結論づけた。けれど、思えば、その頃から既に順也の言動には妙なところが目立っていたのだ。

順也が香奈子を連れていったのは、1町にある「アニマルランド」という施設だった。そこはいわば動物園と水族館が併設されたような大きな施設だ。1市が運営していて、この辺りでは最大規模だといわれている。

平日のこととて入園者はそこまでではないが、それでも幼い子どもを連れた家族や順也と香奈子のようなカップルが目立つ。まずは最初に動物園の方を巡った。香奈子はパンダの前では「可愛い、としきりに歓声を上げ、キリンの前では「切なくなるような眼をしている、と瞳を潤ませた。

確かに、大人しげなキリンはいかにも思慮深そうな黒いつぶらな眼をしており、故郷を遠く離れたこの日本で何を思い生きているのかと想像してみると、切なくなった。ライオンとトラの前に来ると、「怖いけど、流石に王さまみたいな風格があるわ」と、順也の腕に捕まりつつも興味津々で眺める。そんな香奈子を順也はまるで年下の恋人を眺めるような優しいまなざしで眺めていた。

最後はイルカショーだ。ショーは一日に三度行われる。丁度二度めが始まったばかりだったので、二人は最前列に陣取ることができた。

二頭のイルカがまず飼育係によって紹介された。「フィービー」と「アルカディア」という名前前の二頭は紹介されると畏まって、まるで挨拶をするかのように鳴いた。

ショーが始まると、香奈子はたちまち夢中になった。イルカたちは飼育係が掲げる輪をジャンプして華麗にくぐり抜け、投げられるカラフルなボールを見事に受け止める。その度に、観客からは盛大な拍手と歓声が送られた。隣に座ったのは五歳ほどの男の子を連れた三十代ほどの夫婦だった。男の子はもう興奮しっ放しだ。

香奈子もその男の子に負けないくらい、はしゃいだ。

「話には聞いてたけど、本当にイルカって賢いのね」

プールのすぐ間近に座っているため、イルカが上げる水飛沫が飛んでくることも多い。しかし、香奈子は物ともせず、隣の順也に興奮した口調で話した。順也は笑いながら頷く。

「ホント、利口なヤツらだな」

ショーが終わった後、観客たちが次々と出てゆく時、少し離れて座っていた隣の男の子が香奈子たちに向かって、しきりに手を振っていた。

「重典、行くわよ」

母親らしい女性が声をかけると、男の子は慌てて待ち受ける両親の方に駆けていった。

「可愛い子ね」

香奈子が呟くのに、順也が相槌を打つ。

「そうだな」

「私たちも早く子どもが欲しくない？」

だが、その言葉には返事はなかった。もっとも、香奈子も囁くような声でしか言わなかったし、順也に聞こえたかどうかとも判らないのだから、特に気にしたりはしない。

その次は隣の水族館だ。ここは動物園に比べると、随分とひっそりとしていた。人が少ないというよりは、動物の檻は戸外に設置されていたのに対し、こちらの水槽は建物内にあるからだ。

昼間でもなお照明を落とした館内は静まり返り、長い通路がずっと続いてゆく様はあたかも深い洞窟のような雰囲気だ。その薄暗くて長い通路に沿って巨大な水槽が壁のように両側に伸びている。

二人はゆっくりと水槽を覗き込みながら、廊下を歩いていった。途中で香奈子はいよいよ心細くなって、順也の手を握った。順也も香奈子の手をそっと握り返してくれる。ほどよい人肌の温もりが冷房のよく効いた館内ではかえって心地良い。

広いせいか、周囲に他の客の姿は見当たらず、あたかもこの世界には順也と自分の二人だけしか存在しないような錯覚に囚われる。しかし、もし行けるものなら、本当にどこか誰も自分たちを知らない遠い場所に行くのも良いかもしれないと、香奈子にはむしろ思えた。彼の母親もいない、どこか遠くへ行って二人だけで暮らせたらー。

望んでも叶わない望みだと知りながら、香奈子は夢想せずにはいられなかった。時折、遠くで人声が響いてくるのが、唯一、ここは二人だけの世界ではないのだと示している。

色鮮やかな小さな魚たちが大きな水槽で優雅に泳いでいる。その様を見つめていたときだった。ふいに順也のポケットで携帯が鳴り出した。

その音は静寂に満ちた空間に異様に大きく響き渡った。順也の好きなその音楽は、香奈子の知らない外国の映画音楽だという。ベートーベンの『運命』を大胆にアレンジしたものだというのが、香奈子は何とはなくあまり好きではなかった。

何故か、今日はその好きではない音楽が更に神経を逆撫でするようだ。文字通り、その不気味な音楽は、あたかも香奈子の予期せぬ運命の激変に対する警告のようでもあった。

「悪い」

順也は呟き、眼だけで香奈子に視線を寄越し、騒がしく鳴り響く電話を片手にどこかへと消えていった。香奈子に気を遣ったのだろう。

香奈子は一人、ゆっくりと歩いて次の水槽に移動した。そこには珍しい動物がいた。ジュゴン、伝説の人魚のモデルになったとされる稀少な生きものである。

ジュゴンを飼育展示しているのは、国内ではこの水族館だけだ。かつては熱帯や亜熱帯の海に広く生息し、沖縄付近にもかなりの数が生息していたものの、今では日本近海ではその姿を見ることはほとんどなく幻の生きものと呼ばれ、現在は国際保護動物に指定されている。

「一可愛い」

香奈子は水槽にほとんど額をくっつけるようにして、熱心にジュゴンを見た。水槽の中では二頭のジュゴンがゆっくりと泳いでいる。道端の道路工事現場で見かけるような三角錐（コーン）を両手で持っている姿は、子どもが玩具で遊んでいるようにも見える。

「そういえば、ジュゴン是人魚伝説の元になったのよね」

水槽脇の説明を読みながら、そんなことを思い出した。むろん、その程度の知識ならば、香奈子にもある。`人魚姫、の話は女の子ならば誰もが幼い頃、一度は読んで涙した物語ではないだろうか。

人魚姫は嵐の夜、難破した船から美しい人間の王子を助ける。以来、人魚姫は王子のことが忘れられなくなった。人魚が人間の男に恋をしたのだ。しかし、王子は自分を助けてくれたのは隣国の姫だと信じ込んでしまう。

人魚姫は海の底の魔女と契約し、自分の美しい声と引き替えに人間の脚を手に入れた。その上で王子の許にゆく。王子は人魚姫を大切にしてくれていたものの、彼の心は隣国の姫の方に傾いていた。

そんなある日、人魚姫は王子が隣国の姫と結婚するという話を知る。人魚姫のお姉さんたちは魔女から声を取り戻すという薬を手に入れてきて、妹に告げる。

一王子を殺し、この薬を飲めば、あなたは元どおり人魚に戻れる。

人魚姫は夜、寝室に忍び込んだけれど、眠っている王子に短刀を振り下ろそうとしても、できなかった。

一私には愛する男を殺せない。

人魚姫は短刀を棄て、自らは海に身を投げた。

魔女の預言どおり、王子を殺せなかった人魚姫は泡となって消えた一。

何と儂く美しく、そして哀しい話だろうか。香奈子が母から五歳の誕生日にその絵本をプレゼントされた時、香奈子は夢中でページをめくりながら泣いた。

それはとても綺麗な挿絵のついた絵本で、絵が美しければ美しいほど、また伝わってくる哀しみも大きかった。

一どうして、王子は人魚姫を選ばなかったの？

幼い香奈子は何度も母に訊ねたものだった。香奈子は子ども心に信じていた。王子はちゃんと知っていたはずだ。嵐の夜に自分を助けてくれたのは隣国の王女ではなく、人魚の姫であることを。知っていて知らぬ顔で人魚姫を棄て、隣国の王女を選んだのだ。

何故か、香奈子は頑なに信じていた。絵本のどこにもそんなことは書かれていないのに、何度も同じ問いを繰り返しては母を困らせた。

王子は卑怯な男。今でも香奈子は信じている。自分なら、人魚姫のようにには生きない。自分を徹底的に裏切った情け知らずの男なんて、自分の方から棄ててやる。みすみす助かるすべがありながら、自分の生命を犠牲にしてまで王子を他の女に渡すなんて馬鹿なことはしない。

子どもの頃は、ただ可哀想と思っていた人魚姫の印象は随分と変わった。大人になった今では、人魚姫に対して一途な愛をまっとうした健気な女性というよりは、身勝手な男に翻弄され騙された愚かな女だと思うようになっていた。

「香奈子」

呼ばれ、香奈子はつと振り向いた。順也がスマホを握りしめたまま立っている。

「悪いな、何か急に工場の方が忙しくなったとかで、これからすぐに行かなきゃ駄目になった」

「そうーなんだ」

香奈子は、その虚ろな声がまるで自分のものではないように聞こえた。

「悪いな、この埋め合わせはまたするよ」

一週間前も彼は同じ科白を口にした。

一映画に遅れたこの埋め合わせは必ずするから。

その埋め合わせが今日のはずだった。そして、また、その埋め合わせの埋め合わせをするのだろうか？

香奈子はある種の予感を抱いて問うた。

「また先輩の赤ちゃんが具合が悪いって？」

順也はその言い訳に縋るように飛びついた。

「そうなんだ、どうも調子が悪いみたいだな」

「それは大変ね、私なら構わないから、急いで行ってあげて」

「本当にごめんな」

順也は言い終わらない中に駆け出した。香奈子はその背中をずっと見つめていたけれど、ついに彼は一度も振り向かなかった。

気が付けば、水槽の向こうでジュゴンがこちらを見つめていた。細い眼が優しげにいつそう細められている。もちろん、香奈子の勝手な思い込みに過ぎないことは判っていても、そのときの彼女にはジュゴンが心配してくれているように見えた。

「大丈夫、私は人魚姫のようにはならないから」

香奈子はジュゴンに微笑みかけ、ゆっくりとその場を去った。

それから一人で幾つかの場所を見学してから、香奈子は電車に乗って帰った。やはり、水族館を一人で見て回っても面白くはない。予定ではまた高台のレストランで夕食を取ってから順也と帰るはずだった。

一彼は嘘をついている。

その予感は今や確信となりつつあった。

映画に遅れた理由、デート中に急にかかってきた電話。そのいずれもが`工場の先輩の赤ちゃんの具合が悪くなったから、だった。

水族館を出る前、香奈子は戸外の広場にあるベンチに腰掛けてスマホを手にした。アドレス帳を出し、順也の勤務先の自動車工場の電話番号をクリックする。ほどなく電話が繋がった。しばらく発信音が鳴り、事務担当らしい若い女性の声が聞こえてくる。

一藤沢自動車でございます。

香奈子は低い声を出した。

一私、高木といいます、元村さんは今日、工場には出ていらっしゃいますか？

一元村ですか？ はい、今日はいつもどおり朝から出勤しておりますが。

少し不審げな声を出されたので、付け加える。

一私は元村さんの知り合いなもので。

一ああ、そうですか。何なら元村を呼んで参りましょうか。

一いいえ、それには及びません。ただ、元村さんのところの最近、生まれたばかりの赤ちゃんが具合が良くないというお話を噂で聞いたものですから。赤ちゃんに付き添うために、工場もよく休まれているとか。

若い事務員は更に声に困惑を滲ませた。

一いえ、私どもはそのような話を一切聞いておりませんが。元村のところには赤ちゃんが生まれたのは確かです。早産だったので確かにまだ入院中ではありますが、とても元気な赤ちゃんだそうですよ。

—そうですか、では、元村さんがそれが理由で工場を休んだという事実はないのですね？

—はい、私どもが知る限りでは一度もありません。奥さんの出産の当日と翌日一日だけは休んで、それ以降は定休以外はずっと出勤しております。

礼を述べて電話を切った後、香奈子はベンチに座り込んでいた。ショックを受けたというよりは、何も考えられない状態だった。

何故、順也は嘘をついたのか。当然ながら、そこには嘘をつかなければならない理由が存在するはずだ。

その理由について話してみるべきなのだろうか。しかし何故かその時、話してはならないような気がした。二度も同じ嘘をついてまで順也が香奈子から隠そうとした事実。幾ら考えてみても、自分たち二人にとって明るい見通しの立つ理由とは思えない。しかも、二度とも香奈子とのデートの最中なのだ。

深く考えれば、誰かに意図的に仕組まれた邪魔立てとも察せられる。

—私は人魚姫のようにはない。

香奈子は心で呟き、立ち上がった。電話を終えたら食べようと思っていたアイスクリームは既にカップの中で溶けてドロドロになっていた。

それでも、まだ少しの希望を持っていたのだ。工場に電話をすれば、元村の赤ちゃんは順也の言葉どおり、本当に具合が悪くなくて、元村は子どものいる病院に詰めるためによく休むのだと。そういう返事が返ってくると儚い期待を持っていた。

だが、ひと欠片の希望も打ち砕かれた。香奈子はアイスクリームをカップごと、傍らのゴミ箱に放り込んだ。用済みになったものは、こうして無残に棄てられる。刹那、香奈子の中で怖い予兆が湧き上がった。

私は順也にとって、用済みになったのだろうか。

—あなたと息子では所詮、住む世界が違うのよ。息子はいずれ、あなたに飽きたときが来るわ。

順也の母の残酷な科白がまたもや耳奥でこだました。香奈子は不吉な呪いのような言葉を振り払うように、ゆっくりと首を振る。そのまま緩慢な動作で水族館の出口に向かって歩き始めた。

香奈子が順也を買い物に誘ったのは、その三日後だった。その日はコンビニが店内改装工事のため、一日だけ臨時休業して丸一日休みになった。順也の方はいつものように工場に出たものの、夜の寿司屋の方のバイトは休みの日だ。

夕方五時過ぎに帰宅した順也はあまり気乗りしなさそうだったがけれど、香奈子が熱心に誘うと付いてきた。少し脚を伸ばして遠くのスーパーまで買い物に行った。

土曜なので、スーパー内は買い物客で溢れかえっている。順也がカートを押し、香奈子が適当に品物を見繕ってはカートに載せたカゴに入れる。順也も香奈子もTシャツとジーンズの普段着だ。二人の姿は恐らく恋人というよりは、若い夫婦に見えるだろう。一年間の同棲を経て、自然にそんな風に見えるようになってきていることは香奈子も自覚はしていた。

「順也君、今夜、何が食べたい？」

「何でも良いよ」

何を訊ねても、順也は上の空で、まるで心だけどこかに置き忘れてきたかのようである。

「それじゃ、順也君の好きな鯖の味噌煮にしようか？」

現代的な外見に似合わず、和風料理を好む順也である。

食品売り場の鮮魚コーナーで鯖を二きれ買い、野菜売り場で野菜を買ってからスーパーを出た。順也は野菜や鯖、牛乳の入った重たいレジ袋を持ち、香奈子はパンや菓子類の入った軽い袋を持つのもいつものことだ。

並んで歩きながら、香奈子は順也に言った。

「私も一つ持つよ」

順也はいかにも重たげな袋を三つも持っている。香奈子は一つしか持っていないからと申し出たのだが、順也は笑った。

「たいしたことない、平気だ」

「やっぱり、男の人なのね。力持ちなんだ」

香奈子が感心したように言うのに、順也はまた笑った。

「当たり前だろ」

香奈子は順也に手を差しのべた。

「でも、私の持っているのは本当に軽いから、一つは持つわ」

伸ばした手の指先が順也の指先に触れた一その瞬間。順也がビクッとして手を引っこめた。まるで触れられたくないものに触れたかのような反応に、香奈子は少なからず衝撃を受けた。

「順也君、どうかした？」

問わずにはいられなかった。

順也の顔には隠しがたい焦りが滲んでいる。咄嗟に反応したものの、どうフォローしたら良いか判らないといった体だ。

「私に触られたくない？」

単刀直入に言うと、順也の顔がこれでもかというほど白くなった。

「まさか、そんなはずがないだろう。何を言ってるんだか。馬鹿、余計な気を回すなよな」

下手な役者がドラマで科白を喋っているような口調、血の気の失せた顔。

香奈子は順也からそっと眼を背けた。

前方に、小さな公園が見えている。彼から顔を背けたまま呟いていた。

「ね、憶えてる。あの公園、一年前の夏の終わりにもよく来たよね。こうやって二人で散歩がてら買い物に来て、あの公園でブランコに乗りながら色んな話をしたっけ」

香奈子は深呼吸し、思い切って背後を振り返る。

「寄っていかない？ あの頃のように、ブランコを漕いでみたいな」

順也の顔は相変わらず、血の気を失ったままだった。

「悪いな、今日は工場の方がきつくて疲れてるんだ。そんな気分じゃない」

順也は低い声で言い、買い物袋を持ったまま一人で先に歩いてゆく。その後ろ姿を香奈子は哀しい想いで見送った。



人の気持ちとは、ここまで脆いものなのだろうか。順也の心が最早、自分から離れつつあることを香奈子は嫌でも悟らないわけにはゆかなかった。

公園の側を通り過ぎる時、どうしても振り返らずにはいられなかった。小さな公園の片隅にあるブランコは風もないのに、揺れている。

一年前の自分たちがあの場所に見えるようだった。ブランコに乗ってはしゃぐ香奈子の背を何度も押してくれた順也。

ブランコが大きく弧を描いて上がる度、まるで自分が風になったような爽快な気分になったこと。歓声を上げる香奈子に「子どもみたいなヤツだな」と呆れつつも、二人で競争して漕いだときには自分こそ子どものようにムキになってブランコを漕いだ順也。

あの頃に、戻りたい。あの日の私たちに、先のことなんて何も考えず、ただ自分たちの未来には明るい希望しかないと思無邪気に信じていたあの頃に。

あの頃のように、もう一度、私に恋をして、順也君。香奈子は祈るような気持ちでブランコを見つめていた。

けれど、視線を戻した時、当然というべきか、順也の姿は道の先にはなく、どうやら彼は一人で帰ってしまったようであった。

涙の滲んだ眼で見つめる白いブランコは、もう殆ど宵闇の底に沈んでしまっている。九月といえども、午後七時近くともなれば既に陽は落ちて暗い。

涼しいというより薄ら寒い風が香奈子の側を通り抜け、ブランコを揺らして通り過ぎていった。古いブランコが軋んだ泣き声を上げる。その風の意外なほどの冷たさに、香奈子は長い夏の終わりを感取っていた。

その夜は順也が先にシャワーを済ませた。香奈子は湯船に浸かってお気に入りのローズのボディソープで丹念に身体を洗い、髪の毛も順也が好きだというフローラルのシャンプーで洗った。

いつもより丁寧に髪も乾かしてブローして部屋に戻った時、既に順也は二つ並べた布団に潜っていた。

寝室の灯りは小さいのが一つだけ付いている状態で、順也はこちらに背を向けている。

「順也君、もう眠った？」

返事はなかった。香奈子は淡い照明に照らし出されたお気に入りのウユニ湖のポスターを眺めた。暗いためによく判らないけれど、明日の朝になればまた、あの憧れの蒼い空と海、空を映し出した奇蹟のような風景を眼にすることができる。

きっとウユニ湖を見れば、また元気が出るだろう。いつか大好きな男と、順也と行くはずのウユニ湖を見れば。

だが、本当に順也とウユニ湖に行く日が来るのだろうか。それは順也がウユニ湖に興味を持っているとかいないとかの問題ではないような気がした。そう、もっと別の何か。

香奈子はそこで考えることを放棄した。いや、敢えて考えまいとしたのだ。その先を突き詰めて考えれば、どうしても見たくないと思目を背けてきたものを見つめなければならないのは判っていた。

香奈子はそっと順也に近づき、彼の布団にすべり込んだ。

「ね、今日はここで眠っても良いでしょ」

香奈子が甘えるように順也の背中に身をすり寄せた時、愕くほど冷めた声が返ってきた。

「今日は疲れてるって言っただろう！ 良い加減にしてくれよ」

香奈子は黙って彼の布団を出て、自分の布団に戻った。あまりの冷淡で屈辱的な仕打ちに、泣くまいと思っても涙が込み上げた。けれど、こんな場面で泣いても、順也の心は余計に遠のくだけだろう。

この期に及んでも、自分はまだ順也に嫌われまいと、彼の心を自分に引き止めようとしている。その事実、香奈子の順也が好きだという心が彼女自身の自尊心を上回った証でもあった。

人魚姫どころではなく、馬鹿な女だわ。そう思いながらも、香奈子は泣くまいと溢れる涙と嗚咽を必死に抑え込んだ。

どうしても香奈子が見つめたくないもの、その正体は既に香奈子にも判っていた。そう、自分と順也の向かう先にあるのは光り溢れる未来ではなく、別離に違いなかった。

シーンIII サファイアが曇るとき

シーンIII サファイアが曇るとき

その時、香奈子は寝室に掃除機をかけていた。そのため、例の曲一順也が好きで携帯の着信音にしている音楽が流れているのも気付かなかった。

小首を傾げ、音のする方に近づく。すると、風呂場の脱衣場に備え付けてある洗面台の傍らに、順也のスマホがぼつんと取り残されたように置いてある。`運命～変奏曲バージョン、はそこから聞こえているらしい。寝室ならともかく、脱衣場で鳴っているのがよく聞こえたものだ。

今日、順也はいつもどおりに家を出て勤務先の工場に向かった。今日は例の先輩、元村と飲みに行くと言っていた。

一遅くなるだろうから、先に寝んで良いよ。

家を出る間際、順也は笑顔で言った。が、その言葉を額面どおりに信じるほど、香奈子はもう順也を信じられなくなっている。

しかも、今回も`元村、が話に登場している。水曜日に順也の勤務先に電話してからというもの、香奈子は内心は落ち着かなかった。バイト先の自動車整備工場を訪れたことはないが、何度か電話をかけた時、受付の女の子と話したことはある。

順也がインフルエンザで熱を出して寝込んだ時、欠勤届を代わりに電話でしたのである。あのときは付きっきりで看病した香奈子まで続いてインフルにかかってしまった。丁度、順也の熱が下がり、バイトに行けるようになる頃、入れ替わって香奈子が発熱したのだ。

しかし、順也は自分が休むとは言わず、さっさとバイトに出かけた。香奈子はコンビニを休んだり早退したりして時間をやりくりしてまで順也を看病したのに、順也がしてくれたことといえば、食事を作れない香奈子のために、それこそ、そのコンビニで弁当二つを買ってきたくらいのものであった。

とはいえ、その弁当を買ったお金もすべて香奈子が出しているものだ。

一付いていてやれなくて悪いな。

とは言ったものの、内心では当然だと思っているような節があった。

工場の受付嬢は香奈子の手を聞いている。そのため、`高木、と名乗ったときも、できるだけ低い声を出したつもりだ。幸いにも、受付嬢は`高木、という女の声と香奈子とは結びつかなかったようで、例の電話について順也が知っているような気配はない。

恐らくではあるが、今夜、順也が逢うのは元村ではない。別の誰か―あまり考えたくないけれど、女性ではないだろうかと香奈子は見当をつけていた。

香奈子は鳴り続けるスマホを見た。順也が置き忘れていったに違いない。脱衣場に垂れ込めた沈黙がいっそう重たくのしかかってきそうになった時、覚悟を決めてスマホを手にした。

一もしもし。

通話に切り替えるなり飛び込んできたのは、若い女の声だった。一瞬、ヒヤリとしたものが背筋を稲妻のように駆け抜けた。

一順也さん、私、満世(みつよ)です。父の容態が急に悪くなってしまって、ごめんなさい。今日の食事には行けなくなってしまいました。折角誘って頂いたのに、本当にごめんなさい。父の方が落ち着いたら、また、お電話します。

電話が切れる前に、香奈子は先に切っていた。到底、聞いていられなかった。

「満世、初めて聞く名前だ。一体、誰なのだろう。だが、たったわずかの言葉だけでも、その満世という女と順也が相当に親しい関係であることは察せられる。

香奈子は腹立ち紛れにスマホを投げつけた。しばらくは何も考えられない放心状態で、馬鹿みたいに虚空を凝視していた。どれくらい、そうしていただけるか。突然、弾かれたように立ち上がり、スマホを拾った。

幸いにも壊れてはいないようだ。香奈子はスマホの履歴を出した。順也にかかってきた電話、逆に順也からかけた電話、すべての通話が記録されている。

一〇八〇一△△△△一▲▲▲▲

着信も発信もほとんどが同じこの番号で埋め尽くされていた。むろん、合間に他の番号も混じっているが、九十パーセントが同じ番号だ。そして、この番号は着信の最新の番号、つまり、先刻かけてきた満世という女のものだ。

今度はメールの受信箱を見る。やはり、同じメルアドから来たものが圧倒的に多く、送信箱を見ると、そのアドレスに宛てて送信したメールが多い。最新のメールは今朝、受信している。

一父の様子も落ち着いているし、この分なら出かけられそうです。今夜は愉しみにしています。父がこのホテルをととても気に入っているの。披露宴をするなら、私もここが良いと考えています。併設のチャペルも、とても可愛いんですよ。できれば式もここで挙げたいな。

満世

スマホを持つ指が震えた。この返信はメールが届いた五分後に送信されている。まさに、電光石火だ。

一早く満世さんに逢いたいな。挙式や披露宴の会場については、僕にとくに拘りはないから、満世さんの好きにすれば良いと思う。とりあえずは先に日取りを決めなければならないから、急がず一つ一つ決めていきましょう。

順也

日付を見る限り、メールは毎日、しかも数度に渡って行き来している。幾つかを開いてみたら、他愛ない会話だけでなく、デートの相談や約束もあった。

最後に写真データを見た。予想どおり、見知らぬ若い女性と順也が二人で撮影した画像が満載だった。背景は香奈子は知らない場所が多く、中には、どこか病院の一室らしい部屋でベッドに横たわった老人とその女性が微笑む写真もあった。

二人のメールから、この老人が病床に伏しているという満世の父親なのだろうことも想像がつく。愕いたことに、満世といるときの順也はすべてブランド物のスーツを着ていた。満世もまたブランドと判る洗練されたスーツやワンピースを纏っている。

年の頃は二十代前半だろうか。黒髪の艶やかなストレートを解き流し、上品なオフホワイトのワンピースを纏った写真もあった。順也は化粧が濃いのが好きなはずなのに、薄化粧で、どちらかといえば清楚な、いかにもお嬢さまといったタイプだ。タレントの佐々木希に酷似していて、可愛らしい女性だった。

順也のスーツ姿を実のところ、香奈子は見たことがない。香奈子といる時、彼はいつもTシャツにジーンズばかりだ。

その時、順也の母冴子の声が響いた。

一息子とあなたの住む世界は違うわ。いずれ、息子はあなたに飽きたときが来る。

つまりは、そういうことなのだろう。順也は束の間の`気分転換、に飽きて、本来彼が属すべき場所に戻ってゆこうとしているのだ。

それ以上見ていられなくて、香奈子はスマホを元どおりの洗面台脇に戻した。

香奈子は左手の薬指に視線を落とした。その場所には、今も順也からプレゼントされたブルーサファイアのリングがしっかりと填っている。

この指輪を婚約の証として贈られたのは八月のお盆過ぎ、あれからまだ三週間余りしか経っていない。少なくとも、あの夜、順也は真剣そのものだった。そのわずかな間に、彼の身边で何が起こったというのだろうか。

三千五百円と言っていたとおり、指輪に填った石も一ミリほどの小さなものだ。それでも、香奈子にとっては、とても大切なものだ。三億円と引き替えにしても譲れないほど、価値のあるものだと思っている。

香奈子は眼をこすった。涙でぼやけているせいか、小さなサファイアの鮮やかなブルーが色褪せて見える。見ようによっては曇っているようにも見える。

その時、いつか天然石占いサイトで読んだ話を思い出した。その占いは簡単なもので、たくさ

んのカードから自分の好きなものを一枚選ぶというものだ。選んだカードの裏に、今後の自分の運命を暗示する石が書いてある。

香奈子が選んだカードが「ブルーサファイア」だった。カードには蒼く輝く美しい天然石とブルーサファイアという石の名前、更には今後の運命が記されていた。

ブルーサファイアには邪悪なものから身を守るという効果があります。なお、恋愛中の貴女はいつもこの石を身に付けておくことをお勧めします。ブルーサファイアは貞節な愛を示し、パートナーが不貞を働くと光沢が失われるという不思議な言い伝えがあるのです。

むろん、そのときは本気にするはずもなく、三週間前、順也からブルーサファイアをプレゼントされたときも、その占いを思い出しもしなかった。けれど、今となっては、満更、あの無料占いも当たっていたどころか、大当たりであったのではないかと思う。確かに順也から贈られたのはブルーサファイアであったし、順也が心変わりした今、石は本当に輝きを失った。

もちろん、香奈子の思い込みによるもので、安物だから元々そこまで輝いてはいなかったのかもしれない。香奈子の心が輝きを失ったからこそ、そんな風に見えるのだろう。

占いどおりになるなど、まったく笑えるほど、出来すぎた話だ！

香奈子は大粒の涙を流しながら、いつまでも色のくすんだ蒼い石を見つめていた。

静かな諦めが香奈子の心にひろがってゆく。ひたひたと不気味な得体の知れない魔物が少しずつ近づくように、諦めは彼女の心を支配していた。

それでもなお、心の片隅に未練が残っている。その未練を何とかして消さなければならないのに、香奈子にはできず、あがいていた。もし、その未練に別の名前を与えるとするなら、愛と呼べたかもしれない。

その日、順也は午後七時前には帰ってきた。当たり前だ、`満世、との約束は彼女の父の容態が悪くなって中止になったのだから。

だが、香奈子はスマホを見たことも、満世なる女のこと何一つ口にせず、いつものように順也を出迎えた。

「あら、遅くなると聞いてたのに。元村さん、急用でもできたのかしら」

何食わぬ顔で訊ねると、順也は疲れ切った表情で言った。

「また子どもの具合が悪いんだって」

「そう、赤ちゃんも度々良くなったり、悪くなったりして大変ね」

香奈子が言葉にこめた皮肉もまるで通じていないようで、順也はそのまま背を向けて風呂場に入っていった。今頃、スマホを見つけてホッとしていることだろう。まさか香奈子がすべて知っているとも知らないで。

今日、スマホを持たないで満世と順也がどのようにして連絡を取り合ったのかは判らない。だが、順也はメインで使うスマホの他にもガラケーをサブとして持っているはずだ。いざとなれば、そちらに連絡もできるだろう。

順也の様子を見る限り、忘れていったスマホに満世からかかってきた電話を香奈子が取ったことは知らないようである。

香奈子はそこで台所兼物置になっている板の間の片隅にいった。そこは洋服置き場になっている。ステンレスの棒からたくさんのハンガーがぶら下がっていて、順也の服と香奈子の服がそれぞれかけてある。

しかし、実際には香奈子のものばかりで、順也は洗いざらしのTシャツとジーンズばかりだ。ここにはブランド物の高級スーツなんて、一着もない。それは、この場所がブランドスーツにはふさわしくないから？

香奈子はその中から二つのハンガーを取り、かけてあったTシャツを外した。それは同棲を始

めて一ヶ月経った日、スーパーで見つけて買ったお揃いのTシャツだ。何ということはない前に少し大きめの星がプリントされた安物だ。香奈子は赤色、順也は好きな黒色で、星はどちらも黄色だ。

順也が見つけて、どうしても買おうと言い張った。

一緒に暮らし始めて一ヶ月の記念に、良いだろ。

それを着た順也は至極満足そうで、二人は記念にスマホで写真を撮った。けれど、香奈子と撮ったはずの写真はかなりあったはずなのに、順也のスマホからは削除されて一枚も残っていなかった。

香奈子は明るい声で言った。

「このTシャツ、憶えてる？」

香奈子の言葉に、風呂場から出てきた順也が弾かれたように顔を上げた。手にはスマホをしっかりと握りしめている。まるで、あのスマホが満世であるかのように。

「同棲を始めて一ヶ月の記念に買ったのよ」

わざと思い出せる時間を与えるために、ゆっくりと言った。

順也は頷いた。

「ああ」

その瞳が遠い。視線は確かに香奈子に向けられているのに、彼は香奈子を素通りして何か別のものを見ている。

香奈子ははしゃいだ声を出した。

「これを着て、また順也君と写真が撮りたいな」

「ー」

香奈子は順也の前であるにも構わず、シフォンのブラウスのボタンを外し、ブルーのレースのブラジャーだけになった。その上からTシャツを引っ被り、順也にもお揃いのTシャツを差し出した。

「ね、お願いよ」

香奈子が甘えるように頼むと、順也は何も言わず、のろのろと着替え始めた。薄いTシャツ一枚着るのに、まるで何枚も重ね着しているかのような時間をかけて、やっと着る。

香奈子は自分のではなく、順也のスマホを奪い取った。

「じゃあ、撮るわね」

が、スマホはすぐに奪い返された。

「ごめん、俺、やっぱ止めとくわ」

順也は小さく首を振り、Tシャツを脱ぎ棄てると、要らないゴミを放るようにその場に投げた。

そういえば、と、香奈子は今更ながら思い出す。

満世という女とのメールには、順也は`俺、ではなく`僕、と名乗っていた。香奈子に対するときはいつも`俺、だ。`僕、なんて名乗ったこともない。

要するに、私はブランドスーツも`僕、という気取った名乗り方にも、ふさわしくない女。順也が出した結論は、そういうことだったのだろう。

哀しい予感は的中したのだ。

そして、その問題について、香奈子は順也と話し合わなければならなかった。叶うことなら避けて通りたいと願っているその話題を避けることはできない、と。進むにしろ引くにせよ、最早、それは無視することができないほど、香奈子の前に険しい山となって立ち塞がっていることを認識しなければならぬときが来ていたのである。

二十三歳の誕生日から丁度一ヶ月が経ったその翌日、香奈子は工場から帰ってきた順也を笑顔で迎えた。二人はこの十日間、いつもしてきたように黙々と香奈子の作った食事を取り、表面上

は何気ない会話を時折交わした。

この十日というもの、香奈子から順也について、あの満世なる女性について問いたすことはなかった。順也はバイトが休みの日は相変わらず、`元村、の家庭の事情を言い訳に工場に出るのだと言っていたが、確かめなくても工場にはいないはずだと判っていた。

あれ以来、彼のスマホを見る機会もなかったし、工場に問い合わせる気もなかった。そこまで屈辱的なことを重ねるほどならば、順也に直接訊けば良いだけのことだ。それでもなお十日という猶予期間を持ったのは、確かに彼への未練もあっただろうけれど、できれば彼の方から真実を話して欲しいという祈るような気持ちと、ひと筋ほどの二人の関係の修復の可能性だった。

が、残念なことに、そのいずれとして実現はしないまま日は徒(いたずら)に過ぎた。

静かな食事を終えた後、香奈子は手早く後片付けを済ませた。風呂場にゆこうしている順也を呼び止める。

「順也君、少し良いかしら」

「何だ？」

順也のタオルを持った右手がかすかに震えたのを、香奈子は見逃さなかった。

「話したいことがあるの」

「何？ 怖い表情(かお)をして改まって言われたら、ビビるよ」

冗談めかして言う彼に、香奈子は笑わなかった。

切り出すときは流石に唇が戦慄いた。また、どう切り出すかもさんざん迷った。満世の名は取
えて出さないことにした。

「順也君、私に隠していることがない？」

「隠し一事？」

そう、と、香奈子は真正面から彼を見つめた。

順也のタオルを握りしめた指が力の入れすぎで白くなった。洗濯して真っ白に洗い上げたタ
オルよりも白い。

「私が気付いてないと思ってた？」

そのひと言で、順也もすべてを覚悟したようだ。刹那、様々な感情が彼の異国人めいた容貌を
よぎっていった。どこかホッとしたような、それでいて深い哀しみを憶えているような一幾つか
の感情が入り混じった複雑なものだった。

「その様子じゃ、隠し事なんかしてないと言っても信じて貰えそうにないな」

順也の表情は存外に穏やかだ。

「少し外に出て話さないか」

口調も表情どおりに落ち着いていて、いささか拍子抜けするほど取り乱しはしなかった。先刻
の愕き様が嘘のようだ。

もしかしたら、彼の方も香奈子と同じことを考えていたのかもしれない。このままでは駄目
だと、自分たちはいずれにせよ結論を出さなければならないと思っていたのだろう。

コーポラスを出た途端、一斉に虫の声が押し寄せ、二人を取り囲んだ。この辺りはまだ空き地
も多く、草むらが目立つ。一ヶ月前より確実に、虫の声が賑やかになっている。

季節は本当に人の知らない間に、ゆっくりとうつろってゆくのだ。

順也が空を振り仰ぐ。夜空は秋の星座がまるで星座盤を見るかのように、きっちりと浮かんで
いた。九月も下旬過ぎとなれば、夜風も随分と気持ち良くなった。

「星がキレイだよな」

順也は空を見上げながら呟く。だが、残念ながら、香奈子は彼のように秋の夜空を愉しむよう
な心のゆとりはなかった。

何を思ったか順也は数歩あるき、唐突に振り返った。

「あの公園に行こうか」

それだけで、香奈子には彼が何を言おうとしているか判った。あの公園というのは、歩いて三
十分ほどの、大きなスーパーに行くまでの途中にある小さな公園のことだ。九月の初め、香奈子
が順也と買い物に出かけた帰り道、寄ろうと言った公園でもある。

「判った」

香奈子は短く応え、順也のすぐ後を付いていった。二十分ほど、二人は黙って歩いた。見憶えのある懐かしい風景が見えてきた時、香奈子の胸には込み上げるものがあった。

この公園に何度来たことだろう。

あの白いブランコに彼と並んで座り、何度競争して漕ぎ合ったことだろう。

あの時、私たちは確かに幸せの絶頂にいた。そう、丁度、ブランコを力一杯漕いだら、最高に高い場所までゆけるように。

順也が人差し指である一点を指した。香奈子は彼と並んでゆっくりと片隅のブランコを目指した。

白く塗られたブランコはあちこちが剥げかかった年代物である。狭い敷地内にある遊具といえば、実のところ、このブランコだけだ。いつ通り掛かっても来てみても、子どもが遊んでいるところを見たことがなく、無人の小さな公園はどこかうち捨てられた雰囲気が漂う物哀しい場所だった。



公園の中で唯一、目を引くのはブランコとは反対側にある最奥のつるバラのアーチだろう。今も淡いピンク色のつるバラが絡んだ白いアーチは華麗な装飾を施されたおとぎ話に出てくる門のように見事なものだ。鮮やかな緑の葉と今を盛りと咲き誇る花がたわわについたつるバラは、この地区の老人会のお年寄りたちがボランティアで世話をしているという。



香奈子と順也にとっては、買い物帰りに幾度もブランコを漕ぎながら語り合った懐かしい思い出の場所である。

ぼんやりと見事なつるバラのアーチを眺めていると、順也の声に現に引き戻された。

「ごめん、本当に守りたい女ができたんだ」

唐突に振り絞るように発せられた独白に、香奈子は静かに耳を傾けた。順也は引き寄せられるように並んだブランコの一つに座った。

その「守りたい女」というのが満世だと知れる。順也が淡く微笑った。

「愕かないのか？」

香奈子もまた隣の空いたブランコの一つに座った。

「薄々気付いてたから」

「そうなんだ」

順也はまた小さく笑う。

「どこまで話すべきなのか判らないけど、少なくとも、君には知る権利があると思うから」

順也は前置きして、その「守りたい女」との出逢いを語った。

愕すべきことに、順也が満世と出会う、まだ一ヶ月も立っていないとのことだった。長らく音信不通となっていた彼の母牙子から急に連絡が入り、見合いが決まったので、一日で良いから東京に戻るようという指示があったという。

そういえば、彼がその頃、大学時代の友人に逢いに上京したことがあったのを思い出した。まさに、香奈子の誕生日を二人だけで祝い、情熱的な一夜を過ごした一週間後のことだ。一泊二日で戻ってきたので、気にもしていなかった。その時、実は彼は見合いをしていたのだ。

順也が東京に発つ一週間前の夜、香奈子は最高に幸せだった。待ち望んだプロポーズの言葉をやっと彼から聞いて、二人のゆく手には明るい未来しかないと思っていた。なのに、その七日後（翌週月曜）に彼は満世と出逢った。順也が映画に遅れたのはその二日後の水曜だった一。

その見合い相手が満世だというわけだ。むろん、彼は香奈子に彼女の名前を明かしはしなかった。けれど、香奈子はもう知っている。

香奈子もまた彼に彼女の名前は言わなかった。

満世の父は堂本電機に拮抗するファミリー電機の前社長だ。現在は満世の兄が病身の父の跡を継いで社長となっている。歳の離れた兄は既に家庭を持っているが、妻との間に子どもはいない。もう余命幾ばくもないと医師に宣告されている父は、死ぬ前に何としてでも孫の顔を見たいと切望していた。

そのため、満世の見合い相手を広く募っていたところ、順也の母冴子の妹、つまり順也には叔母になる基子が満世の兄浩一の妻と茶道教室の仲間であったことから、満世の花婿候補として順也が急浮上した。

順也が話したのは、大体そんな内容だった。

「相手の女性は幾つなの？」

それくらいはせめて訊いても良いだろうと訊ねた。

「二十九だよ」

「一」

流石に愕いた。順也はまだ大学生で、二十二歳だ。休学していなくても、大学四年、来年にやっと卒業する歳なのに、相手の満世は二十九歳だとは。あのスマホ写真の佐々木希似の可愛らしい女性はどう見ても二十歳そこそこだけれど、女の見え目は判らない。

別に満世の年齢について順也が嘘をつく必要はないから、真実なのだろう。

「最初はもちろん、断るつもりだった。見合いをしたのも、どうしても断り切れないから、とにかく逢うだけは逢って欲しいとお袋から泣きつかれたただけだったしね」

だが、本気になってしまったということだ。順也は溜息をついた。

「逢えば逢うほど、彼女に惹かれていった。彼女、東大を出て、イギリスのオックスフォード大学に留学してたんだ。それからまた日本に戻ってきて東大の大学院に行ったとかで、そんな話を聞いてたら、自分が恥ずかしくなった。こんなところで道草食ってる場合じゃないだろう、大学に戻って、やり直すべきだという気持ちが強くなっていった」

彼にとっては、香奈子の住む世界は「こんな場所」にすぎなかった。予め判ってはいたけれど、面と向かって言われるとやはり堪えた。

順也がかぶりを振った。

「止そう。こんな話」

彼にも香奈子にとって、どれだけ残酷なことを言っているかの自覚はあるらしい。今はそれがせめてもの救いかもしれなかった。

彼は真っすぐな視線を香奈子に向けた。

「俺が悪かった。毎日、生活のために働くのに一杯一杯で、俺たち、いつのまにか大切なものを見失っていたんだな。最近では、ろくに話もしなくなったり、話さない中にどんどん気持ちがずれ違って行って、気が付いたら、もう取り返しのつかないところまで来てたんだ」

香奈子は香奈子なりに、その日にあった出来事などを報告していたつもりだったけれど、順也にしてみれば、それは「話」の中には入らなかったのだろう。いや、話をしなかったのは香奈子ではなく、順也の方だったのかもしれない。

そういえば、喋るのはいつも香奈子の方ばかりで、順也は専ら聞き役に回っていた。男の人というのはそういうものだと思っていたが、そうでもなかったのかもしれない。順也は順也で自分の考えていることを香奈子に伝えたがっていたかもしれないのに、香奈子はそんなことは考えたこともなかった。

順也の瞳は意外なほど澄んでいる。今、二人の頭上にひろがる秋の星空を映したようだ。

「もっと話し合うべきだったんだよな、俺たち」

順也がしみじみと口にした科白は、かえって香奈子の心を打ち砕いた。

彼はもう、別れを決めている。その瞬間、香奈子は悟った。自分たちの関係は二度と修復はできない、これから二人は別々の道を歩んでいかなければならないのだ。

例えば、酷い言葉で罵られたなら、香奈子は順也を憎めただろう。夫婦同然の暮らしをしながら、一方で他の女と見合いし、結婚式場まで探しているだなんて、こういうのを世の中では結婚詐欺とか呼ぶんじゃないだろうか。

香奈子は法律には詳しくないが、たとえ詐欺ではなくても、これ以上ないほどの手痛い裏切りであることには違いない。ここに来るまで、香奈子は順也に投げつける言葉を色々と用意してきたつもりだった。けれど、こんな風に澄んだ瞳を向けられ、自分が悪かったと先に謝られたら、最早、何も言い返せない。

やはり、自分はどこまでいっても、順也には甘いのかもしれなかった。

香奈子は勢いをつけてブランコをこぎ始めた。

一、二、三。

心の中で数えて、`三、のタイミングで更に強く脚を蹴る。すると、ブランコは大きな弧を描き、香奈子は久しぶりに空の高みからジャンプするような爽快感を憶えた。

「香奈子？」

順也が愕いたように呼ぶ。それでも頓着せず、香奈子は更に勢いをつける。

一一、二、三。

また `三、を数えると同時に、思いきり脚に力をこめた。

何故か涙が溢れた。一度溢れ出た涙は止まらず、ポロポロと零れ落ちる。それでも、香奈子は懸命にブランコをこぎ続けた。

一一、二の三。

`三、の掛け声でまた大きく漕ぐ。

順也が叫んだ。

「よし、じゃあ俺も」

彼もまたブランコをこぎ始める。大きく大きく、順也の長い脚が空(くう)を蹴る。

順也がチラリと香奈子を見る。彼は香奈子の涙を見て痛みを堪えるような表情になり、また声を張り上げた。

「香奈子、昔のように競争しよう。どっちが高く漕げるか」

順也の声は聞こえていたけれど、返事はせず、香奈子はどんどんこぎ続けた。順也も負けじと脚を使ってブランコを大きく振り上げる。

やがて、香奈子の乗ったブランコが先に止まった。香奈子はクックッと喉を鳴らした。

「香奈子？」

順也もまたブランコを漕ぐのを止め、心配そうに香奈子を見た。

「一大丈夫か？」

香奈子は小さく肩を震わせながら、こぼれ落ちる涙を拳でぬぐった。

「泣いてなんかないんだからね」

「香奈子」

名を呼ばれ、香奈子は順也を見た。

「自惚れないで。この広い世の中、男は順也君だけじゃないのよ？ たかがフラレたくらいで、泣くものですか」

順也の整いすぎるくらい整った顔がクシャリと歪んだ。香奈子は順也まで泣き出すのではないかと思ったほどだ。が、流石に順也は唇を噛みしめ、うつむいただけだった。

「ごめん、俺のせいだ。香奈子は何も悪くない」

彼は真正面から相変わらず澄んだ瞳で香奈子を見つめた。その瞳の奥に滲んでいるのは間違いなく哀しい覚悟と諦めだ。おかしいものだ。棄てられる私が傷ついた瞳をしているのなら当たり前のことだけれど、棄てる彼の方が手負いの獣のように傷ついた瞳をしている。

多分、順也は順也なりに悩み苦しんでいたのだ。一そう言えば、祐理香などはまた一二股かけられて棄てられた癖に、香奈子はお人好しすぎるんだから。

と、呆れるし怒るだろう。

でも、香奈子はそう信じたかった。自分と同じだけ、順也もまた苦しんだのだと。

香奈子は何も言えなかった。彼を責めるのは簡単だ。けれど、今更、責めても時間は戻らない

。彼だけが悪いのではない、日々の慌ただしさの中で増していった彼との距離を埋めようとしなかった香奈子にも責任はあるのだ。

自分たちだけは大丈夫だと、いつしか油断していた。その油断を香奈子は彼への`信頼、だと勘違いしていた。自分は彼のすべてを理解していると信じ込んでいたのが間違いの元だった。

一年間も一緒に暮らしながら、香奈子は順也の何を見ていたのだろう。ただ順也好みの女の子になることだけに一生懸命で、彼の心のあやを知ろうとしたことは一度もなかった。

香奈子は呟いた。

「いつかもこんな風に二人でここで競争したよね」

子どもみたいにはしゃぎ回って、どちらが高くまで漕げたかを競い合った、あの夜。そんな夜が私たちにも確かにあったのだ。

「そうだな」

順也もまた呟くように言った。二人のかすかな呟きを秋の夜風がどこかに運んでゆく。

二人で競争したあの日から、自分たちは何と遠い場所に来てしまったことか。あの時、確かに同じ物を見て同じ道を歩いていた二人は今、背中合わせに立ち、真反対の道へそれぞれ歩き出そうしている。

香奈子はここに来る前、順也がしていたように空を仰いだ。

「最後に一つだけ訊きたいことがあるの」

自分で口にしておきながら、`最後、`というフレーズが妙に心に痛かった。

「俺に応えられることなら何でも応えるよ」

相変わらず空を見上げたままの体勢で、香奈子は問うた。

「彼女とは結婚するのよね」

既に式場まで内定しているというのだから、間違いはないだろう。そう思っても、訊かずにはいられなかった。

短い沈黙があった。

「そのつもりだ。彼女の親父さんがもう長くないと言われている。恐らく年内には挙式すると思う」

「何故、見合いをした女性との間に結婚の話まで出ているのに、別れ話をしなかったの？」

香奈子が夜空から視線を戻すと、順也が泣き笑いの表情で香奈子を見た。

「香奈子に未練があったんだ。俺は情けない、卑怯な最低の男だよ。だから、なかなか別れを切り出せなかった。縁談の方を断ろうと思ったときも何度もあった」

ホント、最低の男だよな。順也が囁き、うつむいた。

「でも、結局、彼女を選んでしまった」

そのひと言も風が運んで、秋の空へと消えてゆく。

「それでも、俺は今も君を愛しているんだ。たとえ、それが人として許されないことだとしても」

彼の言葉を聞きながら、香奈子は眼を閉じた。

確信があるわけではないが、満世という女は香奈子の存在を知っていたのではないか。一度目は順也が映画に遅れ、二度目はデート中を狙ったように順也のスマホは鳴った。あれは恐らく満世からの電話であったに違いない。

金を有り余るほど持つ女ならば、金を使って順也の身辺を洗いざらい調べ上げることは容易すかったはずだ。

けれど、最早、そのようなことは何の意味もない。

一終わった。

一つの恋が今、終わったことを香奈子はしみじみと感じていた。

あなたと出逢って、少し気の弱い私は確かに変わった。これまで自分を冴えない女の子で魅力がないとコンプレックスを抱いていた私に初めて`可愛い、`と言ってくれた、あなた。

あなたの言葉で、私は生まれて初めて女としての自信を持てたのだ。あなたに愛されるだけの

価値のある自分であることに喜びを感じた。

これ以上はないというほど酷い形で裏切られながら、香奈子の中に彼への憎しみが無いのが我ながら、不思議だった。

夏と共に始まった恋は一年後の夏の終わりに最後を迎えた。本当に、ひと夏だけ輝きを放ち、地に落ちてしまった線香花火のように儚い恋だった。

それから、二人はまた歩いてコーポラスまで戻った。

香奈子と順也はいつものように並べて布団を敷き、その夜はずっと手を繋いで眠った。

翌朝、目覚めた時、彼はもういなくなっていた。隣の布団は既に冷たくなっている。

いつも自分で布団を畳んだことのない彼がきちんと布団を畳んでいた。そのことが、もう彼が二度とここに戻るつもりはない事実を告げていた。

知らなかった。彼がいない部屋がこんなにもだだっ広く感じられるなんて。

枕許の時計を見ると、時間は午前五時を少し回ったところだった。

香奈子は窓辺にゆき、パステルブルーのカーテンを開けた。振り向けば、夜明け前の薄青さがそこそこに漂う中、壁に飾ったポスターが眼に入る。

どこまでも果てなく続く蒼穹と、空の蒼さや雲をそのまま映し出したような南国の奇蹟の楽園、ウユニ湖。いつか二人で行けたならと願っていた香奈子の夢はこの日、永遠に叶わうことのない見果てぬ夢となった。

エピローグ（終章）～ `終わり、は `始まり、へと続く～

エピローグ（終章）～ `終わり、は `始まり、へと続く～

「ママあ、お野菜の盛りつけは、これで良い？」

呼ばれ、私は小さな娘の手許を覗き込む。

「ちょっと見せてくれる？」

「はい」

可愛らしい手のひらの上に乗ったガラスの器には、レタスが綺麗に盛りつけられていた。

「それで良いわ」

「じゃあ、次は、うさぎさんの林檎だね」

娘はませた口調で言う。私は微笑んだ。

「そうね、後は、うさぎさんの林檎と切り分けたゆで卵をつけてちょうだい」

「はい」

元氣よく娘が返事をした丁度その時、玄関のインターフォンが鳴り響く。

「あ、パパだ！ お仕事終わったんだね」

娘がパタパタと脚音を響かせ、玄関に飛んでいった。

ドアの施錠が外れる音、次いで賑やかな娘の声がキッチンまで聞こえてくる。

「一でね、恵里香ね、幼稚園の先生に褒められたんだよ。恵里香の描いた人魚姫の絵がいちばん上手だって」

今日、娘の恵里香が通う私立幼稚園では参観日があった。年長の恵里香のクラスでは先生が「人魚姫」を読み聞かせし、子どもたちに聞いた話からイメージする絵を描かせるという内容だった。

お絵かきの好きな恵里香は最後のシーンの、王子を殺せなかった人魚姫が海に飛び込んで泡になり、天に昇ってゆくところを描いた。二十人いる子どもたちの中で、そのシーンを描いたのは恵里香だけだ。後の子は大抵、人魚姫が海を泳いでいるところだったり、王子と出逢うシーンだったりした。

絵が実際、よくできていたのと、珍しいラストシーンを描いていたのとで選ばれ、父兄や子どもたちが見守る中で恵里香の絵が紹介されたのだ。

どうやら、恵里香はそのときのことを父親である夫に話しているらしかった。

「へえ、恵里香はどうして最後のシーンを描いたんだ？」

夫も興味を誘われたらしく、問いかけている。その質問に、幼い娘は声を張り上げた。

「だって、恵里香は最後がいちばん良いと思ったもん」

「何故、良いと思ったの？」

二人の会話を聞いている中に、私は娘に訊ねずにはいられなかった。無意識の中に廊下に出て、夫と娘の前に立っていた。人魚姫は結局、王子に裏切られ、棄てられた。それでも愛する男を殺せなくて、自分を犠牲にしたのだ。

「王子に裏切られた人魚姫は死んじゃったのに、それが良かったの？」

幼い子ども相手に大人げないと思いつつも、私はムキになって娘に尋ねた。

何故なら、愛する人に裏切られて棄てられた可哀想な人魚姫の姿は、そのまま昔の私の姿に重なるから。

私の問いに対し、娘は黒いつぶらな瞳で私を見た。

「ママ、あの話は人魚姫が死んだところで終わってるけど、恵里香は絶対に続きがあると思うんだ」

「ふうん、どんな続きなんだい？」

夫はしゃがみ込んで娘の視線の高さになった。

大好きなパパに、恵里香はにっこりと笑いかけた。

「人魚姫は泡になって天国に行ったんだよ。そして、また生まれかわったの。今度は、ちゃんと人間の女の子としてね。生まれかわって、素敵な人と出会って、今度は幸せになったから、恵里香は最後のところを描いたの。あの終わりは、次の始まりのための場面なんだから」

「ホウ、終わりは次の始まりのためのものか。恵里香は小さな頭で難しいことを考えられるんだな」

夫が恵里香の頭をよしよしと撫でると、恵里香はへへと恥ずかしげに笑い、はにかんだ顔で私を見た。

「終わりは次の始まりのためにあるのね」

何故か泣きたい気分で、私は呟き恵里香に笑って見せた。

「お帰りなさい」

私が微笑みかけると、夫が「ただいま」と破顔する。

順也と別れた五年後、私は夫となる男性とめぐり逢った。憧れて止まないミクロネシアのウユニ湖へと共に旅立ったのは、順也ではなく別の男(ひと)だったのだ。

けれども、今、私は穏やかな幸せの中にいる。私だけを見つめてくれる男の傍に。

「恵里香が賢いのはママに似たからかな」

夫が恵里香を抱き上げる。夫と眼が合い、私は微笑んだ。

私たち家族が暮らす、町の高層マンションの我が家の玄関に今、その写真は大切に飾られている。



どこまでも続く蒼い空には、真綿のような雲が幾つも浮かび、蒼く燦めく海には空の景色がそのまま映り込んでいて、どこまでが空で、どこまでが海が判らない。

南国の楽園、奇蹟と呼ばれる美しきウユニ塩湖を背景に、後ろ姿を見せて佇む花嫁と花婿。

その一枚の写真は、私にとっては見果てぬ夢の象徴などではなく、まさしく「始まり、だったのかもしれない。

(了)

☆本作品に登場するすべての人物、地名、団体名等はフィクションであり、実在するものとは一切関係ありません。

ブルーサファイア

宝石言葉—高潔、慈愛、誠実、心の成長

つるバラ

花言葉—愛、無邪気、爽やか、いつも美しい。

あとがき

七月から夏祭、八月のお盆行、水祭と寺の多忙期が漸く終わりました。今はひと段落つき、そろそろ新しい作品をと思い描いたのが本作品です。

何と現代物です。思い返せば、現代小説は去年の六月以来ですね一笑

六月、七月と初の高麗時代に挑戦した長編を描き、八月では現代物を書く決めていました。久しぶりなので、自分でも、どうだかなあと思いながら、冷や汗をかいております。

今回は高麗物とは異なり、あまり細かいところまでは決めておらず、大筋だけ先に考えていた物語りを実際に書き進めながら、細かいところは考えてゆきました。

現代物を書くのはまた時代物とは違う楽しさがあります。当たり前ですが、時代考証などがないので、気が楽です。また、普段は自分がしないようなファッションなどもヒロインにさせてみたりして一。ちょっとした変身願望も満たしたりしています。

ところで、少し作品に触れたいと思いますが、こういう話はホントにどこにでもあると思います。小説の中の絵空事ではなく、現実起こりうるということです。

ヒーローのしたことは、人間として許されることではありません。`どちらも好きだから、というのは優柔不断男の狡い言い訳でしかないと作者は考えます。ただ、私が描きたかったのは男の狡さではなく、ヒロインの思考転換でした。過去を単に振り返る物語ではなく、最後のエピローグでそれを感じていただければ幸いです。

実をいうと、このウユニ湖の写真というのはモデルがあります。この夏、とある写真コンテストに応募したところ、前年度の大賞作品を見る機会がありました。その写真が実はウユニ塩湖を背景に後ろ姿を見せて佇む花嫁と花婿だったんです。

その写真を見た時、冗談でなく心が震えました。ハネムーンで訪れた新婚カップルは新郎さんはタキシードのズボンとシャツブラウス、花嫁さんはウェディングドレスでした。もちろん幸せの絶頂を切りとった写真であることは判りきっていても、私は何かこの写真を見ていると、物語が湧いてくるような気がしたのです。

ですが、この話とその写真の方々とはまったく関係はございませんので、あしからず。この物語はあくまでも私の妄想の産物にすぎません。

感動した割には、たいした物語が生まれませんでした。しかし、この拙い物語をご覧頂いて、何かをまた感じて下さった方が一人でもいたとしたら、作者としてはこんな嬉しいことはありません。

今回も最後までご覧いただき、ありがとうございました。

後は、サブタイトルの`もう一度、私に恋をして、は、実はアマゾンでたまたま見つけて気に入った曲のタイトルからヒントを貰いました。歌の方は`もう一度私と恋をして、です。

私はどちらかといえばバラード系が好みで、この曲を歌っている関口ゆきさんという人も失礼ながら、全然知りませんでした。見つけたのは、たまたまでした。でも、視聴してみたら、本当

に切なくて良い曲だったので、ダウンロード購入しました。

まだ調べてはいないですが、ユーチューブなどで聞けないでしょうか。是非、チェックしてみてくださいね。

東 めぐみ拝

追伸

なお、来月はまた一旦、朝鮮半島に渡るつもりでおります。それではまた、来月、お逢いしましょう。

2016/08/23

～終わりに～

今回の作品を描くに当たり、こんなことを考えました。

絵（イラスト）、写真、自分の感動や想いを表現する方法、手段は色々あります。キレイなイラストで見る人を魅了し、色鮮やかな写真で多くの人の心を驚掴みにする—そういう人たちに憧れるけれど、私には「筆、（小説）」という表現手段があります。あの美しいウユニ湖の写真を見て感じた私なりの想いと感動を今回の作品に託しました。

たいした作品ではありませんが、とにかく自分の想いを伝えるすべを持っていて、良かった、幸せだと思います。

※作中に登場する「アニマルランド」についてですが、現在、国内でジュゴンがいる水族館は鳥羽水族館（三重県）のみとなっているそうです。しかしながら、本作品に登場する水族館のモデルが鳥羽水族館ではありませんし、H町やI町のモデルが三重県というわけではありません。

最後の言い訳～もう一度、私に恋をして～

<http://p.booklog.jp/book/109343>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109343>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109343>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ